

チベット語訳『妙法蓮華註』「序品」和訳(1)

望月 海慧

1 はじめに

本稿は、先行する「チベット語訳『妙法蓮華註』和訳」に続くものである。今回は第1章「序品」の冒頭部分の和訳を提示する⁽¹⁾。既出の和訳を提示すると次の通りである。

- ①「チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について」『身延山大学仏教学部紀要』13, 2013, pp. 1-22.
- ②「チベット語訳『妙法蓮華註』「信解品」和訳」『大崎学報』173, 2017, pp. 37-80.
- ③「チベット語訳『妙法蓮華註』「葉草喩品」和訳」『身延山大学東洋文化研究所報』19, 2015, pp. 77-103.
- ④「チベット語訳『妙法蓮華註』「授記品」和訳」『身延山大学仏教学部紀要』15, 2014, pp. 1-18.
- ⑤「チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳」『身延論叢』20, 2015, pp. 1-54.
- ⑥「チベット語訳『妙法蓮華註』「五百弟子受記品」和訳」『身延論叢』19, 2014, pp. 35-58.
- ⑦「チベット語訳『妙法蓮華註』「授学無学人記品」和訳」『日蓮教学教団史の諸問題』山喜房佛書林, 2014, pp. 41-51.
- ⑧「チベット語訳『妙法蓮華註』「法師品」和訳」『法華文化研究』39, 2013, pp. 1-15.
- ⑨「チベット語訳『妙法蓮華註』「見宝塔品」和訳」『日蓮仏教研究』6, 2014, pp. 7-22.

最初のもは本和訳の直前の部分の和訳であり、その他のものはテキスト後半であり、「序品」の残り第2章「方便品」と第3章「譬喩品」の和訳は未発表である。ただし、この3章それぞれが全体の25パーセントほどあるために、原稿を分けて掲載する。

2 『妙法蓮華註』「序品」冒頭部分の構成

『法華経』の全体構成を解説した序文に続く今回の和訳箇所から『法華経』の本文の解説が始まっている。ここに提示する和訳は、経典冒頭の「如是我聞」から始まり、説法が行われた場所とそこに集まった衆会を述べた経文に対する解説箇所である。その構成は、次の通りである。

- | | |
|---------------|---------------------|
| [1] 如是 | [2] 我聞 |
| [3] 一時 | [4] 仏 |
| [5] 住王舎城耆闍崛山中 | [6] 與大比丘衆萬二千人俱 |
| [7] 皆是阿羅漢 | [8] 阿若憍陳如など |
| [9] 舍利弗など | [10] 有学無学二千人など |
| [11] 菩薩摩訶薩八万人 | [12] 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉 |
| [13] 皆得陀羅尼 | [14] 供養無量 |
| [15] 以慈修身善入佛慧 | [16] 名称普聞無量世界 |
| [17] 文殊師利菩薩など | [18] 常精進など |
| [19] 釈提桓因など | [20] 名月天子など |
| [21] 自在天子 | [22] 娑婆世界主 |
| [23] 八龍王 | [24] 四緊那羅 |
| [25] 四乾闥婆王 | [26] 四阿修羅 |
| [27] 四迦樓羅王 | [28] 韋提希子など |

次に、本章のチベット語訳の特徴について述べておく。まず、「序品」は、特定のタイトルをもたないために、他の章に見られるような「来意」「差別」「釈名」の3項目からなる章名の解説はない。その代わりに、經典の冒頭に共通する句である「如是我聞一時仏」に対する解説から始まっている。これに『法華經』が説かれた場所である「王舎城耆闍崛山中」とそこに集まった衆会が述べられたものが加わっている。

このうち、「如是我聞」については、漢文では『大智度論』を引用し、続いて15種の解釈を典拠とともに解釈しているものの、チベット訳はこれらの引用文のうち、『仏地論』と真諦三蔵と長耳三蔵の解説部分を翻訳するのみで、經論のタイトルへの言及はない。

[6]の「大比丘衆」の解説箇所では、漢文は「大」「比丘」「衆」の順で解説されているのに対して、チベット語訳では、「比丘」「衆」「大」の順に入れ替えられている。これは、対応する『法華經』のチベット語訳が“dge slong gi dge 'dun chen po”であり、末尾の形容詞の「大きな」が前の名詞句「比丘のサンガ」を修飾していることに起因している。すなわち、チベット語訳者は、『法華經』のチベット語訳の語順に従い、『法華玄贊』の漢文の順序を入れ替えていることになる。

その一方で、[8]では、『法華經』の引用文が「ナディー・カーシャパ」で終わり、次の[9]がシャーリプトラから始まっている。ただし、チベット語訳ではこの間に「ガヤ・カーシャパ」があり、チベット語訳者は『法華經』のチベット語訳に基づいて「ナディー・カーシャパ」を「ガヤ・カーシャパ」に入れ替えていないことになる。

〔9〕のシャーリプトラなどの名前の由来については、漢文はおのおの名前の由来を述べているのに対して、チベット語訳では最初の3人のみであり、その他は省略している。ここでは、梵語の漢字表記の違いなども言及されており、それをチベット語で表現することは困難であったこともその要因の1つであろう。同様の例は、続くセクションにも見られる。

なお、漢文では、『法華経』の「各礼仏足退坐一面」の解説でこのセクションを結ぶが、『法華経』のチベット語訳ではこの句が欠けているために、漢文の翻訳もなされていない。

3 チベット語訳テキストの和訳

〔1〕そこで経典の本文の注釈は、「このように私は聞いた」と言うこと⁽²⁾に3種の意味があり、何故に解説するのかと、それが何を意図しているのかと、その本文の解説との3種である。そのうち、何故に解説するのかは、仏世尊の涅槃について聖アーナンダが4種の意味を質問したもので、「世尊の涅槃の後に比丘たちは世尊に場所を用意したように未来において誰に依るのか」、「どこにとどまるのか」、「粗暴な比丘をどのように教化するのか」、「一切の経典の始めにどのような言葉を述べるのか」と質問し、世尊のお答えが「涅槃の後に波羅提木叉を示しなさい。戒に住し、四念処にとどまる準備をしなさい。粗暴な比丘らには述べないことで教化しなさい。一切の経典の最初には『このように私は聞いた』と書きなさい」と説かれたので、それ故に、ここでも「このように私は聞いた」と言われている⁽³⁾。

その如是語が何を意図して説かれたのかは、信の円満が説かれており、典籍⁽⁴⁾からも『このように私は聞いた』と言うことで信が生じるようになる。『明らかに喜ぶ』と言うことで知恵が生じるようになる」と出ており、信により入が可能になり、知恵により生が可能になる。信は、一切の善法の根本で、知恵は甚深を理解するようになる究極である。また他の軌範師による解説⁽⁵⁾からも、「このように」とは、4種の意味があり、毘沙門天のように裕福なので「譬喩は真実のとおりである」と言われ、述べられたその通りに聞いたので「そのように」と言われ、質問のとおり返答されるので「そのように」と言われ、他者が述べたそのことを漏れや付加なく繰り返しているそのことに対して「このように」と言われ、経典の菩薩は、昔の世尊が解説した通りに繰り返しているで「このように」と言われる。また⁽⁶⁾、もろもろの所化の中から聖者であるアーナンダが多くの衆会に法を示す際に衆会に疑惑が生じており、この3つを取り除くためにアーナンダが「このように」と述べている。すなわち、アーナンダは〔三十二〕相と〔八十〕種好を備えていることにより法師であることに対して、衆会が「悲心をもつ世尊が涅槃から再び起き上がって、衆会に法をなすのか」、「他方の如来がこの国土に説法しに来るのか」、「アーナンダがこれそのものを明らかに悟って、説法をするのか」と言うその疑惑を取り除くためにアーナンダが「このように私は聞いた」と述べるのである。また、他の軌範師は⁽⁷⁾、「三時の仏世尊に漏れや付加なしにそのまま説くのでそのように」と述べている。また、

諸法の真実の在り方が1つであることが損なわれないものが「このように」と言われ、また聖者であるアーナンダが世尊に聞いたままに繰り返すので「このように」と言われる⁽⁸⁾。

〔2〕「私が聞いた」とは⁽⁹⁾、このような法を自分自身は明らかに聞いているが、自分から自分で相続してそれを聞いたわけではないので、「私は聞いた」と言われる。「我」とは、五蘊を世間の言説のみとして設定したものを「私である」と設定するが、外道が設定したようなものではないが、「デーヴァダッタ」と「ヤジュニヤダッタ」と名付けたものを「私」と設定するように。また、ここでは誰が聞いたかという名前を述べずに、一般的に「私が聞いた」と言うのは何故か、という質問に対して、多聞のアーナンダが聞いたものを集めて、聞いたものが海[の如く]なので、三乗の經典をアーナンダがまとめたから、名前は述べられていない。「聞いた」とは、耳根と識を一つにまとめることで聞の自慢が生じる。僅かの間に聞いたことが説かれているが、見たことなどが説かれていないことは、甚深なる意味の考察に聞慧が先行し、この界において声による仏の所作がなされるので「聞いた」と言われる。また「私が聞いた」と言うことで如来が解説した真実のとおり述べられ、生起と損滅の極端が取り除かれるので「このように私は聞いた」と言われる⁽¹⁰⁾。

〔3〕「一時に」とは⁽¹¹⁾、ここで時の円満が説かれており、それも2種である。法王の悲心で有情利益をなすことを意図したものと、福分をもつ多くの衆生の成熟の時と同じで解説に中断なく一時に成立したことである。また、時にも2種あり、道理の時と唯識の時である。そのうち道理の時は、説く者と聞く者が行蘊の刹那生滅の自性を伴い、先のは過ぎず、後のものは引かない時の部分だけを相続する限り存在するそのようなその時を「一時」と設定するが、一刹那に生じ、滅する時を言うのではない。そのうちの識の時は、説く者と聞く者の意に三時のままに顕現し、長短の時間や昼夜として顕現するその時であり、例えば、夢で長い時間が経過していても、覚めてしまえばその如くではないように。また「一時」と言うのも、刹那の時と四と六と八の時を言うのではなく、悲心による利益と根の成熟が一時に成立したそれを時と知るのである⁽¹²⁾。

〔4〕「世尊」と言うのは⁽¹³⁾、円満な師で、根の円満などの六つの功德をもつものが「世尊」と言われる。⁽¹⁴⁾

〔5〕「王舎城の靈鷲山におられた」とは⁽¹⁵⁾、円満な場所が説かれている。「そこにとどまり、入り、起きる」と言う意味であり、聖者と天と梵天のおられる場所より勝れたものとして説かれているから、「世尊がそこにおられた」と述べられる。「王舎城」とは、昔のプラセナジット王の宮殿に多くの臣民と鷲がおり、常に失火の恐怖があり、法律をもつ者が、今後、誰かの家で火災があれば、魔の住处である墓場に一人で去らせることにしてから、最初に王舎城の火災により王自身がその墓場に移つり、宮殿を建ててから移ったその臣民たちも悪霊に支配されないために門に「王舎城」と書かれたのである。それ故に、その地は王舎城となった。王舎城と

靈鷲山の両方を説いたのは、在家と出家の両方に有益なので両者が説かれている。その王舎城は、すべての宝珠が生じる他の一切の根源よりも勝れているように、この妙法の解説も他のすべての經典より勝れていることが説かれており、その靈鷲山も他のすべての山より勝れているように、一乗のこの乗も二乗より特に勝れているのでその場所を解説している⁽¹⁶⁾。

〔6〕経に「比丘の大サンガで1万2千の比丘」と出ているこれは⁽¹⁷⁾、円満な衆会である。その衆会の円満も5種で、その理由を説いたものと、未了義と了義を述べたものと、数の多少を設定したものと、衆会の次第を説いたものと、注釈の意味を説いたものとである。理由を説いたものにも5次第があり、信と信解の理由に対してこの歓喜により嘘を述べたものではなく、その他者から相続したものを述べたものではなく、他者の言葉を繰り返したものではないと説かれているので、一緒に聞く者もたくさんいることを説くことで他の者たちが信解するようになる理由と、円満な2つの区別を説くことで他者が信じるようになる理由で、天王である帝釈と梵衆により囲まれて述べたものと、また、シャーリプトラと、マンジュシュリーと、マイトレヤと、菩薩を導き、了義を2度3度請願して、原因と結果と学処の経が説かれるので衆会に対する利益と楽により信解するようになり、またそれぞれの根から一乗のこの教義を3度繰り返して解説して大乘に心を起こし、生じていない法に対する忍の獲得などの三根の者にこの法が説かれ、また過去時に生じたものを説くことで現在の衆生たちが信を起こして、「そのような聖者で正しい者たちと一緒に」と信が生じるようになる⁽¹⁸⁾。

そのうち、未了義と了義を説いたものが、例えば、世尊は変化なされ、声聞らに了義を示し、菩薩らに未了義を示しており、報身は、菩薩に了義を示し、声聞に未了義を示しており、これが未了義と了義の両方を示す地を説いたものである⁽¹⁹⁾。

そのうち、数の多少を説いたものも、以前の15衆で、大きな功德に名称があるものと、大きな功德に名称がないものと、大きな功德の尼僧たちと、近くにいる尼僧たちと、不可思議な功德をもつ聖者たちと、帝釈天たちと、四天王と、自在天子たちと、色界の諸天子と、龍王たちと、緊那羅たちと、乾達婆たちと、阿修羅たちと、迦楼羅たちと、人王たちである。また、衆会は6種で、世尊である多宝衆と、分身衆と、龍宮から来たものと、地中から涌き出た衆会と、妙音菩薩と、普賢菩薩の衆会である。それらの衆会も法を聞き、法を理解し、法を行じ、法を受持し、法を解説し、法を知る区別により異なっているだけである。この衆会に独覚の衆会が説かれないのは、独覚は仏が世間におられない時に生じているから。無色界の諸天も如来の光により触れるものたちは法を聞き、周りに集まっている場合に、その界は根が熟していないので光により明らかにされず、そのことからここでは説かれない。地獄の者たちをここで説かないのは、福分をもたないのでここでは述べないのである。如来の加持による陀羅尼の門を解説する時に悪趣が減するので彼らに説くこともある。上の衆会に説かれてないくても後で説かれているのである⁽²⁰⁾。

それらの衆会の次第は、まとめれば四種で、声聞の衆会と、菩薩の衆会と、王と、王の衆会とである。それも内と外に区別するならば、声聞と菩薩の衆会は内の衆会である。八部の夜叉は、外の衆会である。菩薩の声聞の衆会を先に説いたのは、四種であるからである。すなわち、声聞衆は出家なので、如来の衣と同じなので声聞を先に説き、声聞は常に仕えており、留まっています、遠くにいけないので、先に説き、出家者の戒を守る門から先に説き、在家が出家を尊敬することを説くために先に説いたのである⁽²¹⁾。

また、衆会の円満⁽²²⁾に四種あり、数の円満と、成就の円満と、功德の円満と、行道の円満である。数の円満は、「衆会は無数である」と述べられる。成就の円満は、声聞たちは小乗で成就し、菩薩たちは大乘で成就し、利他をなすことである。功德の円満は、声聞たちに16種の語義が説かれ、菩薩たちに13種の語義により説くことである。行道の円満は、世尊が衆会により囲まれ、尊敬し恭敬する在り方で上品にとどまっていることである。

そこで、「比丘」と言う意味は3種で、魔と外道を滅し、乞食と戒を護る者がサンガの数に入り、清浄な生活で生活し、三門を浄化してとどまることである。そのサンガの4人以上の多くの比丘が同じになり論理と教義が混ざらない意味である。「大」とは、法と数などの大をともし、学と無学より勝れているので殊勝が大きく、智慧と知を見るので功德が大きく、1万2千人がいるので数が多いので大である。「一緒に」とは、一つの場所の意味である⁽²³⁾。

[7]「すべて阿羅漢だけである」と言うものから、「自在のみ」までに述べたものは⁽²⁴⁾、功德の円満で、經典から16種の語義が述べられている。それも略して3種にまとめるならば、上の言葉を後のもので解説した經典と、一般的な特徴と区別された特徴を説いたものと、意味の略義との3種である⁽²⁵⁾。上の言葉を後のもので示すことは、上の言葉により後の言葉が起こされ、また後の言葉が上のものにより解説したものが、「漏が尽きた阿羅漢」と説いたものと、一切の煩惱が尽きたものが「阿羅漢」と解説される如くである。「漏が尽きた」とは、煩惱が明らかに動くことで諸有において漏れるので「漏」と言われる。明らかに動くことと習気の在り方でとどまることのその2つもまとめて「漏」と言われ、それも、欲の漏と、有⁽²⁶⁾の漏と、無明の漏の3つである。四諦を見て修習することで捨てられる煩惱と睡眠が欲漏である。色と無色界において怒りを起こすさらなる煩惱が有の漏である。三界の15の無明が、無明の漏である。そのうち、欲界の煩惱も欲が根本とされるので欲漏である。色と無色界における他の煩惱により起きないが、有に結合することが煩惱なので有漏である。無明も実際に無明により漏れるので無明漏である。第4句により第2句を解くことが「自在に漏が尽きている」と言われる。第2句と第3句により第4句を説くことが、漏が尽き、煩惱がなくなるので「真実の自在を得ている」と言われている。煩惱が明らかに動くことと習気としてとどまることを捨てているので「自在を得ている」と言われる。第6句により第4句を説くことが、慧解脱と心解脱により自在を得ることで、三昧の障害を捨てることによる「心解脱」と自性の障害を捨てることによ

る「慧解脱」である。無明と愛などが捨てられることによる慧解脱と、それと結合した心が場所を変えることによる心解脱で、その両者の過失を離れて、無為そのものを考察するので「自在を」と言われる。それらの束縛である明らかに動くことと習気の在り方でとどまることも捨てているので「煩惱はない」と述べられる。心解脱と慧解脱のために「聡明な」馬のように温厚で従順で、「大きな象」とは、例えば、不楽なすべての場所に行っても道は楽であり、損なわれずに行くように分けられた場所に至って、障碍がなくなっており、それ故に「なすべき所作をなしている」。「なされるべき所作をなしている」ので、「荷を下ろしており」、「道諦と滅諦が明らかに成立するので後の有を獲得しない」と言う意味である。有と結合する重荷を下ろしているので、「自利を得ており」、「涅槃の楽を得る」と言う意味である。自利の楽を得ても、煩惱の原因を捨てるので「有に結合するすべしとも領受せず」、「三界に生まれない」という意味である。漏が尽きた「真実の言葉により心解脱」で、心解脱は見により捨てても、修により捨てられる一切の煩惱を取り除き、「心の自在」を得て、功德の究極により神変と神通などを完成している⁽²⁷⁾。

区別は二つで、一般的なものと、個別なものを説いた門で、「すべしとも阿羅漢である」と言うことは、一般的特徴である。他の15義が個別の特徴である。阿羅漢の意味は、15種の相応しい意味があり、そのうち漏が尽きているので食べ物と座などのすべしによる供養に値するので供養の場所で飾られている。一切の煩惱を離れているので師としての能力を成立させており、利益と名声を求めることを離れているから。入ることに相応しく、家と城市に入る際に心の自在により欲の対象により惑わされないから。魔と外道を制圧するのに相応しく、心解脱智の自信をもっているから。諸法に対する智慧が速やかに相応し、慧解脱のために諸法の特徴に長けている。法の解説に対する遅速の過失を離れることに相応し、法の解説に対する知との関係を厭うことを離れ、例えば駿馬のように心はとてしもなく従順であるから。一人で寂所に相応し、食べ物と衣服などの一切の資具を集めず、ためることがないことで足りるを知ってとどまることは、例えば大きな象が喧騒を離れているように。一人で禪定に執着せず、なすべきことをなすことで常に師の地を精進するから。常に空性の行のために所作をなすことで我と我所への執着を離れているから。常に無相の行をとまなうことで重荷を下ろしているので、滅そのものに住している。常に無願の行をとまなうことで自利の楽を得るので輪廻を願うことなく住している。世間の禪定の楽味に執着することがないので有との結合を完全に捨てている。諸法の特別な功德に対して、神通により楽しむので真実の言葉による心解脱である。勝義そのものの功德に楽しんでとどまり、心の自在を得ることで無為に触れるので心の自在を得ている。真実のままに知るので一切衆生に対する利益の功德を獲得させるから⁽²⁸⁾。

まとめた意味は、上に述べた15の語を10の功德にまとめるべきで、言説の結果と不可言説の結果で、阿羅漢の結果において有為は言説で、無為は不可言説の結果である。10種の功德のう

ち、漏が尽きることと煩惱がないことは、束縛と随眠の2つが捨てられるから。自在になったことと心と慧の解脱は、心の自在により世間の一切の功德を制圧して、種々なる混乱を寂滅しているから。如来が説かれたものに続けて入るので、聡明な馬のように温厚で従順で意のままに自在になっている。特別な功德の獲得は、象のように大きな威厳による力と神変の円満である。なすべきことをなした特別な功德については、世尊に対する奉仕と尊敬は、正しい法の奉仕をなすことで、財産によるのではない。功德の円満は、なすべきことをなした円満で、有学の地は完成しているので滅諦の辺際に至るから。遥かに超えた功德は、荷を下ろして自利を得て、有との結合を完全に尽くして、死の重荷を下ろして、誤った生活を捨てることで利益と名声を求めず、有の束縛を断じて有学の地を超えているから。上のまた上の功德を集めることは、真実の知恵の心解脱により無為の結果に触れるから。衆生に対する利益の功德を集めることは、心の正しい自在を得るために神変と神通を得るからである。上のまた上の功德を集めるすべての功德の辺際に至って、波羅蜜が円満になるからである⁽²⁹⁾。

〔8〕また、經に「このように」と言うものから「ナディー・カーシャパ」の間で⁽³⁰⁾、これ以後の大声聞の名前の解説に2つ。先にそれぞれの名前を説いたものと、功德をまとめたものである。それらの声聞の次第は、ある者は出家の前後から設定され、ある者は大きな功德により先に設定され、それらも、世尊の最初の正等覚の時に5大声聞が出家した。その次にヤショードラの50の衆会が出家した。その次にウルヴィルヴァー・カーシャパの500人の衆会とガヤー・カーシャパの300の衆会と、ナディー・カーシャパの200の衆会と、シャーリプトラの100の衆会と、マウドガリヤーヤナの100の衆会が出家し、総じて2510人が出家した。5大声聞も、最初に世尊が明らかに悟ってから法輪を廻した最初の時にアージュニヤタ・カウディヌヤが真実を最初に理解して、「私はすべてを知っている」と述べてからアージュニヤタ・カウディヌヤと名付けられた。マハー・カーシャパは、最初の仙人の光をもつ者の種で、このカーシャパ自身が最初に誕生した時も光が生じたので「カーシャパ」と名付けられ、他のカーシャパより白いので「マハー・カーシャパ」と名付けられている。ウルヴィルヴァー・カーシャパと他のものは、水と山と木の実から名付けられ、名称のみに尽きている⁽³¹⁾。

〔9〕經典に、「シャーリプトラ」から「カッピナ」まで⁽³²⁾、それぞれの名前が解説され、シャーリプトラは、鷲の名前と同じで、美しい目の子なので「シャーリプトラ」と名付けられる。マハー・マウドガリヤーヤナは、昔の仙人自身が山に住み、豆を撒いたことから姓になり、マウドガリヤーヤナのその母の相続なので「マウドガリヤーヤナ」と名付けられる。神変が大きいので「マウドガリヤーヤナ」と名付けられる。マハー・カーティヤーヤナは、昔の仙人が一人で頭を剃ったことから姓になり、その理由から姓から名付けられている。これ以後の声聞たちのある者は、星から名付けられ、ある者は以前のバラモンの姓から名付けられ、ある者は形が似たものから名付けられており、一般的に名称だけに尽きる⁽³³⁾。

[10] 経に、「学と無学」と言うのは⁽³⁴⁾、戒と三昧と智慧が学処であり、その3つにとどまるのが学である。その3つを完成したものが無学である⁽³⁵⁾。

[11] 経に、「8万の菩薩摩訶薩」と述べたものが⁽³⁶⁾第5で、聖者の不可思議な功德を説いたそれも3種に分けられる。その数と、その功德と、それらの特徴がそれぞれ区別される。そこで「菩薩摩訶薩」と言うものに2種の意味があり、大智を最高にすることで自利が説かれ、大悲を最高とすることで利他が説かれている。菩提は、分別の意味で、成就させるべき結果である。薩埵は、悲心で衆生を救うことに勝れている。また、三菩提による成就を対象と時により籠を満たすことなく努力するので菩薩である。また、菩薩は智慧である。薩埵は方便で、その法自身により衆生に対する利益と楽の力であるから。摩訶とは、第八地以後のものが「大」と言われ、他の菩薩と二乗たちを別にするために「大」と言われる⁽³⁷⁾。

[12] 経に、「無上正等覚を退かない者たち」と出ているのは⁽³⁸⁾、以後の13句により聖者の功德が説かれており、それも2種に区別される。上下の支分に分けることとまとめた意味が説かれている。支分は部分で、前の部分で一般的特徴が説かれている。後の部分で個別の特徴が説かれる。「無上正等覚から退かない」と言うものは、その一般的特徴で、他は、それぞれの特徴である。「無上正等覚」とは、入ることを理解する4種の意味である。清浄法界を理解することが無上の理解であり、外部の外道の理解より特別に説かれているもので真実の理解で、二乗の理解より特別に説かれているので円満な理解で、菩薩の行を完成していない者たちに対して特別に説かれているので「正等覚」と説かれている。不退転も、信解からの不退転と、列を退かないことと、入ることを退かないことと、行を退かないことである。また、不退転に2種あり、すでに得たものを退かないことと、得ることになるものを退かないことである。得たものは、第一地である。得ることになるのは、第八地以上である⁽³⁹⁾。

[13] また、経に「陀羅尼を得ている」と言うものから「不退転の法輪を廻す」と言うまでには⁽⁴⁰⁾、これ以後は12句により区別する部分が説かれており、それを区別するものに10種あり、最初の9句により自利が説かれ、次の1句により利他が説かれ、最初の9句にも2種あり、最初の8句により有為の功德が説かれ、次の1句により無為の功德が説かれ、最初にも2種あり、最初の5句により福德と知恵の資糧が説かれ、後の3句により悲と知恵が説かれている。最初の5句も2種に分けられ、最初の3句により内行が説かれ、その次の2句により善を把握することが説かれている。最初にも3種あり、自利の成就と、利他の成就と、善法を把握する利益である。把握にも2種あり、行の成就を把握することと、疑惑を断つことである。悲と知恵の解説も、前に慈愛と悲心が説かれ、その次に、智慧と知が説かれている。それも3種である。法を聞くことから退かないことは、そのすべても陀羅尼を得ているからである。陀羅尼は、保持のための陀羅尼で、それも2種である。まとめたものの保持と、広げたものの保持である。また、保持は、言葉と意味の保持により法を聞く者たちが忘れずに把握するのでまとめて把握

することである。第八地以上の菩薩は一切法に耐えることができ、考えることができ、保持することができ、忍が聞慧で、心が思慧で、把握することが修慧である。そこでも、広げることが把握することは4種で、法を広げることの保持と、意味を広げることの保持と、法を喜ぶことの忍と、明呪の陀羅尼である。それも2種で、最初は成就するものである。第3は、成就すべきものである。聞などは、自利である。法と目的などは、利他である。それも、原因と結果の在り方に分けられる。法を説くことを退かないことは、4つの大きな自信と7つを持っているからであり、2種の地において退かないからである。輪も3種で、八聖道に対して中心と周縁などが円満なので完成した意味と変化と転移の意味で、見道により修道を行くことと、修習により不退道にとどまり、聖者になることと自分自身が聖者であることで利他を示すように、一つ一つ相續して転移する意味と、「例えば輪の迷乱により裂かれ、制圧されるように、聖者の道にとどまる心の煩悩を制圧する」と言う意味とで3つである。また、この輪の意味は5種で、法を区別する支分と真実の見解などが輪の自性にとどまることと、聞と思などの聖道を起こしたものが輪の原因のようにとどまることと、解脱の五蘊などの聖道における空が輪の支分にとどまることと、聖者の四諦などが輪の行境にとどまることと、涅槃と菩提が明らかに成立したものが輪の結果にとどまることで、その5つの法も聖教と典籍と行と結果に見られる⁽⁴¹⁾。

[14] 経に、「数百千の仏を尊敬し、数千仏が正しく賞讃する」までで⁽⁴²⁾、それに対してこれは、善友に依る不退転であり、数百千の仏を尊敬し、百千の仏に善根を起し、数百千の仏が正しく賞讃することは、自分の身体と心をまとめることで一切の善業により供養し、奉仕することである。その奉仕をなすことも、10種に区別され、如来の舍利と塔の明らかにあるものに対して供養し、奉仕して、さらに、他の如来の舍利と塔を明らかに作って、供養し、奉仕することである。また、一人の如来の塔を十方の三時の如来の塔と思って、供養と奉仕をなせば、すべてに対して奉仕と供養をなすことであり、そのような特徴そのもので自分自身が供養をなし、また悲心により貧者に対して実践によりできるだけ布施をなして、「すべての者を喜ばせなさい」とその行を他者に対しても献上し、供養させ、自分が供養と奉仕をなすように、他者もなすようになり、香と花と宝珠などを敬意をもって供えることで供養と奉仕をなし、広大な奉仕と供養をなすことは、長い間供養と奉仕をすることで、清浄な心で大菩提に廻向してから自分の数百千の身体で無数の如来に無量の香と花で供養し、奉仕すべきで、無数の喜ばしくて快い言葉を10方に満たして供養と奉仕をなし、また我慢と傲慢を捨てて清浄な供養により奉仕をなし、真実の行による供養と奉仕をなすことは、四無量を明らかに修習して、誰に対しても求めるものをそのように与えて、刹那だけでも真実性に忍と信をとどめてから動かずに無相の心により菩薩の律儀を捨てずに四摂事の正しい行により供養し、奉仕することは、過去の供養が育ち、譬喩も耐えられない。特別によい奉仕で、福德と功德が無量なので法と僧にもそのように供養する⁽⁴³⁾。

[15] 經に、「身体と心を慈愛により正しく修習する」から「波羅蜜の在り方を理解している」とは⁽⁴⁴⁾、それぞれの法に入ることが慈愛と悲心であり、身体と心を修習するので他者に利益をなしており、苦の場所から引き出し、楽の場所に入れる⁽⁴⁵⁾ことである。真実の界から知恵が退かずに入り、2つの我見を離れる知恵により大きな智慧を理解し、真如の界より退かないので波羅蜜多の在り方を理解している⁽⁴⁶⁾。

[16] 經に、「数百千の世間界に知られている者たちが数百千万億那由他の有情のすべてを解脱させている」と出ているのは⁽⁴⁷⁾、なすべきことをなしていることで法にとどまっているので退かず、如来の説かれたものを保持することで方々に知られており、数百千の衆生を解脱させている。功德の殊勝をまとめたものは、どこにとどまり、如何なる心にとどまり、如何なる知恵にとどまり、如何なる行境にとどまり、如何なる自信にとどまっているのかを知ることは、数百千の無量の如来に供養と奉仕をなすことで善根を起し、善知識にとどまることである。どのような心に依るのかは、慈愛と悲心を修習したものにとどまり、無限の一切衆生を解脱させ、利益をなすことを思うことである。「如何なる知恵にとどまるのか」と言うのならば、如来の知恵に入り、大智により般若波羅蜜の在り方を理解することで、知恵も3種で、甚深なる知恵を区別することで衆生たちが如来の知恵に入り、神通の知恵で、大きな力と神通により有情を導くことで利益をなす知恵である。大きな智慧により真実の辺際を理解する知恵が、般若波羅蜜の在り方を理解する知恵である。「如何なる行境にとどまるのか」と言うのならば、数百千の世間界において知られており、器と衆生の世間は、諸菩薩の成就の行境である。「如何なる自信にとどまっているのか」と言えば、数百千那由他の有情をすべてから解脱させることで、菩薩は3種の知恵により多くの衆生を解放し、利益をなしている⁽⁴⁸⁾。

[17] 經に、「すなわち、文殊師利大菩薩と、觀自在大菩薩と、得大勢菩薩摩訶薩」とは⁽⁴⁹⁾、これ以後の菩薩のそれぞれの特徴を区別したもので、一般の特徴とそれぞれの特徴とである。これらの菩薩のすべても、過去の誓願と行から名付けられており、7片に分けて解説するべきである。最初のこの3人の菩薩は、衆生を苦から引き出し、楽を与える力を持ち、文殊師利は北方の宝積如来で、その名前を聞くだけで一切の罪過が浄化され、『仏華嚴經』にも、「東方の五台山に住み、1万の菩薩と一緒にいた」と出ている。觀自在菩薩は、見ることに精通しており、衆生を見て、苦の地から引き出すことに精通している。『授記經』に、無量光如来が涅槃してから聖觀自在に授記し、その次に聖大勢至に授記し、大勢至菩薩は赴いたその世間界を動かすなどの大力を示し、衆生の苦を寂滅させるので「大勢至」と言われる⁽⁵⁰⁾。

[18] 經に、「常精進菩薩と不休息菩薩」と言うものは⁽⁵¹⁾、自利の行と利他を努力し、順序通りである⁽⁵²⁾。「宝掌と勇施菩薩」は、衆生で貧困と病気により悩まされている者たちにあらゆる種類の利益をなすので名付けられている⁽⁵³⁾。「宝月と月王」は、衆生の無明の闇を取り除く門から名付けられている⁽⁵⁴⁾。「大力菩薩たち」は、衆生を教化し、無限の衆生を大小の力で

救済する⁽⁵⁵⁾。越三界菩薩と跋陀婆羅菩薩は、世間を解放し、妙法を護ることから名付けられている⁽⁵⁶⁾。弥勒などの菩薩は、世間と出世間の意味から名付けられ、苦の地から引き出す菩薩は宝を衆生に与え、涅槃の寂靜に入れることから付けられている⁽⁵⁷⁾。「それらなどと一緒にいる」とは、まとめの言葉である⁽⁵⁸⁾。

[19] 経に、「帝釈天の眷属の2万天子」は⁽⁵⁹⁾、上に外の衆会と内の衆会の2つを述べたものについて、内の5衆は上に説いたものであり、外の10衆は人と非人に区別し、非人も天と非天に区別し、天についても欲天と色天に区別し、欲界の天についても帝釈と、四大王と、自在天の3つである。そのうち、これが最初で、地に住するものと虚空に住するものとに区別される。地に住するものは、帝釈と四大王で、帝釈は、須弥山頂に住み、33天の王である⁽⁶⁰⁾。

[20] 経に、「月天子⁽⁶¹⁾」と言うものから「2万と一緒に」と言うまでは⁽⁶²⁾、その3つの光をもつものは四大王の界に属しており、「日天子は聖観自在で、月天子は聖大勢至で、虚空蔵菩薩は宝光菩薩である」と経に解説されている。日は、50量により囲まれ、月は、そのとおりである。星は、水晶から作られ、「内の大きなものを18クローシャにより囲まれ、内の小さなものを4クローシャにより囲まれている」と解説され、それらのすべても、虚空を動き、四洲のまわりを動き、動く地は須弥山の中腹を廻っている⁽⁶³⁾。

[21] 経に、「大自在天子の衆会と一緒にいる」とは⁽⁶⁴⁾、虚空に住する天で、双子と歓喜をもつ天が自在天の子で、善の異熟が大きいので上から上に正しい結果が生じる天の如意樹から望むものを何でも受けて、自在なので自と他の享受が円満である⁽⁶⁵⁾。

[22] 経に、「娑婆の主である梵天と梵天の衆会と一緒に」とは⁽⁶⁶⁾、それらが色界の諸天で、禪定の次第によりとどまり、その天の主は他者に利益と喜びをなすので悲しまず、ムニを領受するので苦しまない⁽⁶⁷⁾。

[23] 経に、「八龍王の多くの衆会と一緒にいる」までは⁽⁶⁸⁾、これ以後の非天の五衆からの最初で、龍の衆会である。ナンダとウパナンダは過去の兄弟で、善心により雨と風を適時に降らす王で、さらにまたそれぞれの功德と力から名付けられている⁽⁶⁹⁾。

[24] 経に、「四緊那羅王の衆会と一緒にいる」とは⁽⁷⁰⁾、心地よい声の功德をもつ者たちである⁽⁷¹⁾。

[25] 経に、「乾闥婆の種の衆会と一緒にいる」とは⁽⁷²⁾、彼らは動いて、踊りと音楽の心地よい声を与え、香により生活する⁽⁷³⁾。

[26] 経に、「阿修羅の四衆たちと一緒に」とは⁽⁷⁴⁾、天の行がなく、動揺と虚偽による行が多いので天ではなく、例えば「人の典籍を損ない、人ではない」と言われるように。瑜伽行の典籍では、天界と解説されている。他のものには、餓鬼と畜生の界に属するとも説かれている⁽⁷⁵⁾。

[27] 経に、「ガルダの四衆と一緒にいる」とは⁽⁷⁶⁾、ガルダは四生から生じ、龍の種も4種

から生じ、このガルダは食物として龍を食べる。食べる方法は、このガルダは翼で海に至り龍を取り出して食べ、福德をもち如来の衆会に生まれた龍たちは、ガルダにより殺されずに四無量の心により守られるので、「比丘たちよ、誰であれ一切の害から解放されることを望むために四無量に依るべきである」と説かれている⁽⁷⁷⁾。

[28] 経に、「ヴィデーヒーはアジャータシャトルと一緒にである」とは⁽⁷⁸⁾、人の王の衆会が説かれ、王を述べたのは、勝者が集まっているからで、アジャータシャトルの物語は、未だ生まれていない過去において父を殺す想をともなっているため、未生の父の敵と訳されており、その彼が父を殺したことが、声聞の典籍では罪を告白したことで地獄に球を投げられただけのものに生まれたが、後に独覚の結果を得るとも解説され、大乘では、甚深なる法を理解する告白により地獄に落ちないとも解説され、詳しくは『大槃涅槃經』に説かれている如くである⁽⁷⁹⁾。

注

(1) 和訳箇所は、『丹珠爾（対勘本）：中華大藏經』第69巻, pp. 493-517に相応するが、批判的校訂版のテキストを別に出版する予定である。なお、〈付録〉「漢文テキスト「序品」の科文(1)」は研究協力者金炳坤氏によるものである。

(2) 前稿と同じように、『法華經』の引用箇所に対して、梵（ケルン）、藏（中村瑞隆）、漢（鳩摩羅什訳、『大正新脩大藏經』）の該当箇所をあげておく。

[1] Skt. 1.5; Tib. 1.3; Chin. 1c19.

(3) 651bl: 【1】經 如是我聞 贊日…

662a4-15: 如是我聞等以三門分別一說之所由二立之所以三正釋其文說所由者如大術等經說其本緣佛臨涅槃時佛命有疑當問時優婆離阿樓駄教阿難請問四事一佛滅度後諸比丘等以誰爲師二依何處住三惡性比丘如何治罰四一切經首當置何言佛教之云我滅度後以波羅提木叉爲汝大師依戒而行依四念處住安處其心惡性比丘梵檀治之梵檀默然故不應打罵但默擯故一切經首當置如是我聞等言後阿難結集還依佛教廣述所由皆如經說

(4) 漢文は『大智度論』のタイトルを記しているが、チベット語訳者はテキストの特定ができていない。

(5) 『仏地論』の四義。漢文では、『撰大乘論』『毘婆沙論』『顯揚論』などの諸説が言及されるが、チベット語訳者は、各タイトルには言及せず、「軌範師」でまとめている。

(6) 真諦三蔵による解釈。

(7) 長耳三蔵による解釈。

(8) 662a15-663a21: 由皆如經說立之所以者爲令衆生生信順故智度論云如是我聞生信也信受奉行生智也信爲能入智爲能度信爲入法之初基智爲究竟之玄術信則所言之理順順則師資之道成由信故所說之法皆可順從由順故說聽二徒師資建立於此信中略爲十釋一趣極果之初因依仁王等經趣聖位之初因故四十心以信爲首最初發起大菩提心須具十德起三妙觀大菩提心以善根爲自體以善友爲緣以不退屈而爲策發善根即信精進念定

慧故攝大乘云清淨增上力堅固心勝進名菩薩初修無數三大劫二入諦理之基漸諸論皆說將入聖位有信根信力有信根故萬善因此而生有信力故四魔不能屈伏因此經初創令生信三通妙真之證淨能越惡道離賤貧因故入聖已證四不壞信三寶故能越惡道由信戒故離賤貧因故論亦說有信現觀四荷至德之喜依毘婆沙說信者食法味之嘉手學佛法者如大龍象以信爲手以捨爲牙以念爲頸以慧爲頭於其兩肩擔集善法象所飲噉以鼻爲手故學佛法者最初生信五聖七財之元胎法財初故學者大商元規法寶教獲聖財故初生信顯揚論云七聖財者謂信戒聞捨慧慚愧信即一焉六善本因之淑路善法本故瑜伽論云入諸善法欲爲根本作意所生觸所集起受所引攝定爲增上慧爲最勝解脫爲堅固出離爲後邊欲爲本者起希望故作意所生數警覺故觸所集起和心心所對勝緣故受所引攝領在心故定爲增上心微寂故慧爲最勝擇善惡故解脫爲堅固息纏縛故出離爲後邊覺道滿故信既爲欲依故最初令起七啓機門之勝手接教手故俱舍論云拔衆生出生死泥又後陳正宗爲佛教手序令生信爲衆生手兩手相接出淤泥故又智度論云如人有手至於寶山隨意所取若其無手則空無所得有信心人入佛寶山得諸道果若無信心雖解文義空無所獲八湛心水之清珠令心淨故成唯識云信如水珠能清濁水能治不信心性渾濁故九建名道之良寶宣尼云兵食信三信不可棄自古皆有死人無信不立如大車無輓小車無輒人而無信不知其可十顯衷誠之佳傳春秋言苟有明信澗嶠沼沚之毛蘋蘩蕪藻之菜可薦鬼神可羞公王而況君子結二國之信此中十義初八依真後二依俗故經首置如是經義親從佛聞離增減失爲令衆生起信樂心順修學故正釋其文者佛地論說如是之言依四義轉一依譬喻如有說言如是富貴如毘沙門如是所傳所聞之法如佛所說定無有異定爲利樂方便之因或當所說如是文句如我昔聞二依教誨如有說言汝當如是讀誦經論此中如是遠則佛之教誨近則傳法者之教誨也或告時來如是當聽我昔所聞三依問答謂有問言汝當所說肯定聞耶故此答言如是我聞四依許可如有說言我當爲汝如是而思如是而作如是而說謂結集時諸菩薩衆咸共請言如汝所聞當如是說傳法菩薩便許可言如是當說如我所聞或信可言是事如是謂如是法我昔所聞此事如是齊此當說定無有異由四義故經初皆置如是我聞眞諦三藏云微細律明阿難昇座集法藏時身如諸佛具諸相好下座之時還復本形勸集藏傳亦作是說衆生三疑一疑佛大悲從涅槃起更說妙法二疑更有佛從他方來住此說法三疑彼阿難轉身成佛爲衆說法今顯如是所說之法我昔侍佛親所曾聞非佛更起他方佛至轉身成佛爲除此疑故經初言如是我聞 結集之緣如藏章說注法華云如是者感應之瑞如以順機受名是以無非立稱衆生以無非爲感如來以順機爲應傳經者欲顯名教出于感應故建言如是注無量義云至人說法但爲顯如唯如爲是故言如是寶公云以離五謗名爲如是第一句如是此經離執有增益謗第二句如是此經離執無損減謗第三句如是此經離執亦有亦無相違謗第四句如是此經離執非有非無愚癡謗第五句如是此經離執非有非非無戲論謗光宅云如是將傳所聞前題舉一部也如是一部經我親從佛聞即爲我聞作呼轍耳梁武帝云如是如斯之義是佛所說故言如是長耳三藏云如是有三一就佛三世諸佛共說不異名如以同說故稱是二就法諸法實相古今不異故名爲如如而說故稱爲是三就僧以阿難聞望佛本教所傳不異故名爲如永離過非故稱爲是由此同說稱理無謬所傳不異故經可信以上合有一十五釋

(9) [2] Skt. 1.5; Tib. 1.3; Chin. 1c19.

(10) 663a21-664a8: 言我聞者傳法菩薩自指己身言如是法親從佛聞故名我聞非謂我者定屬一人我謂諸蘊世俗假者然我有三一妄所執我謂外道等所橫計我二假施設我謂大涅槃樂淨常我除二乘倒強施設故三世流布我謂世共傳天授祠授等今傳法者隨順世間指自稱我不同前二即是無我之大我也問諸佛說法本除我執何故不稱

無我乃言我聞答有四義一言說易故若說無我通蘊處界知此說誰二順世間故三除無我怖故言無我者為誰修學四有自他染淨因果事業等故所以稱我問若爾何故不稱名字但稱我耶答有三義一示不乖俗宗雖顯真語不乖俗理雖顯妙言不乖僞欲顯真諦不離俗故二我者主宰自在之義集法傳云有三阿難一阿難陀云慶喜持聲聞藏二阿難跋陀云喜賢持獨覺藏三阿難伽羅云喜海持菩薩藏但是一人隨德名別由是阿難多聞聞持其聞積集三慧齊備文義並持於三藏教總持自在若稱名字雖順正理無於諸法得自在義由斯稱我不道阿難三我者親義世間共言我見我聞此將為親證若言阿難聞或非親聞從他傳受今顯親聞世尊所說非是傳聞破他疑網故不稱字但言我聞聞謂耳根發識聽受所說今廢耳別就我總稱故云我聞雖依大乘根識心所對境和合方名為聞然根五義勝於識等故根名聞根五義者所謂依發屬助如根如根者如根明昧識亦明昧若但聞聲可唯在耳既緣名義便在意中故瑜伽言聞謂比量耳根名聞者親聞於聲與意為門意方聞故以二為門熏習在總因聞所成總名為聞廢別耳意總名我聞聞慶喜於時親亦見覺知佛所說何故但言我聞不言我見等答有三義一欲證深理要先聞法名等詮義非色等故二此界以聲而為佛事聲為所依名等有故三希證菩提要聞熏習由聞熏習成出世故由斯經首不說見覺知唯說我聞據實于時亦見佛說諸餘佛土以光明等而為佛事可言見等於此義中應生分別問為佛說法言我能聞為佛不說言我聞耶答有二解一者龍軍等言佛唯有三法謂大定智悲久離戲論曾不說法由佛慈悲本願緣力衆生識上文義相生此文義相雖親依自善根力起而就強緣名為佛說由耳根力及自意變故名我聞以為體性故無性云隨墮八時間者識上直非直說聚集顯現以為體性彼自難云若爾云何菩薩能說彼論初言薄伽梵前已能善入大乘菩薩為顯大乘體大故說攝大乘品故為此難論復自答彼增上生故作是說譬如天等增上力故令於夢中得論呪等故經亦言始從成道終至涅槃於其中間不說一字如母齒指子生喚解二者親光等言佛身具有蘊處界等由離分別名無戲論豈不說法名無戲論謂宜聞者善根本願緣力如來識上文義相生此文義相是佛利他善根所起名為佛說聞者識上雖不親得然似彼相分明顯現故名我聞世親說言謂餘相續識差別故令餘相續差別識生彼此互為增上緣故由此經說我所說法如手中葉未所說法如林中葉如末尼天鼓無思而作事故此中二解隨彼兩文綺互解釋應知說此如是我聞意避增減異分過失謂如是法我從佛聞非他展轉顯示聞者有所堪能諸有所聞皆離增減異分過失非如愚夫無所堪能能諸有所聞或不能離增減異分結集法時傳佛教者依如來教初說此言為令衆生恭敬信受言如是法我從佛聞文義決定無所增減是故聞者應正聞已如理思惟當勤修學

(11) [3] Skt. 1.5; Tib. 1.3; Chin. 1c19.

(12) 664a9-c6: 【2】經一時(1c19) 贊曰第二說教時分也此有二義一法王啓化機器成集說聽事訖總名一時二說者聽者共相會遇時分無別故言一時機感應化時無別故初就剎那相續無斷說聽究竟假名一時此有二解一者道理時說聽二徒雖唯現在五蘊諸行剎那生滅即此現法有酬於前引後之義即以所酬假名過去即以所引假名未來對此二種說為現在此過未世並於現在法上假立即說聽者五蘊諸法剎那生滅前後相續事緒究竟假立三世總名一時非一生滅之一時也二者唯識時說聽二徒識心之上變作三時相狀而起實是現在隨心分限變作短長事緒終訖總名一時如夢所見謂有多生覺位唯心都無實境聽者心變三世亦爾唯意所緣是不相應行蘊法界法處所攝此言一時一則不定約剎那二則不定約相續三則不定約四時六時八時十二時等四則不定約成道已後年數時節名為一時但是聽者根熟感佛為說說者慈悲應機為談說聽事訖總名一時不定約剎那等者聽法之徒根器或鈍說時雖短聽解時長或說者時長聽者亦久於一剎那猶未能解故非剎那亦不定約相續者由能說者得陀羅尼說一

字義一切皆了或能聽者得淨耳意聞一字時一切能解故非相續由於一會聽者根機有利有鈍如來神力或延短念爲長劫或促多劫爲短念亦不定故總約說聽究竟名爲一時亦不定約四時六時八時十二時者一日一月照四天下長短喧寒近遠晝夜諸方不定恒二天下同起用故又除已下上諸天等無此四時及八時等經擬上地諸方流通若說四時等流行不遍故亦不定約成道已後年數時節者三乘凡聖所見佛身報化年歲短長成道已來近遠各不同故經擬三乘凡聖同聞故不別說成道已後若干年歲然諸經中有說相續者此經下云說是法華經滿六十小劫即其事也有說四時者涅槃經言二月十五日有說六時八時十二時即涅槃云於其晨朝嚼楊枝時金剛般若云飯食訖收衣鉢洗足已敷座而坐日正午時上生經云於初夜分舉身放光遺教經云於其中夜寂然無聲有說成道已後年數時節者十地經云第二七日於他化自在天王宮摩尼寶藏殿內說華嚴經又法華經云三七日中思惟是已趣波羅奈轉四諦輪又無量義此經等云我成道來四十餘年等雖有是說隨一方域化土衆生聞見結集且作是言仍非初總題說法時是故俱應總說一時間處中有淨穢隨機定說處時中凡聖殊何容不別說答說處標淨穢淨穢可定知說時有短長聖凡不可准一會機宜有利有鈍長時短時如何定准故處可定說而時但總言一時

(13) [4] Skt. 1.5; Tib. 1.4; Chin. 1c19.

(14) 664c7-665a7: 【3】經佛(1c19)贊曰第三說教主也梵云佛陀此略云佛有慧之主唐言覺者覺有三義一自覺勝凡夫凡夫不自覺故二覺他勝二乘彼不覺他故三覺行圓滿勝諸菩薩菩薩雖復修於二覺行未滿故佛地論云具一切智一切種智能自開覺亦能開覺一切有情如睡夢覺如蓮花開故名爲佛一切智者能自開智如睡夢覺智觀於空智理智真智無分別智如所有也總相而言斷煩惱障得一切種智者覺有情智如蓮花開智觀於有智事智俗智後所得智盡所有也總相而言斷所知障得准諸經梵本皆稱本師名薄伽梵佛教安置以此一言含諸德故翻譯之主意存省略隨方生善故稱佛名問此三身中何身所攝答准處准機應聲聞而爲化佛准文准器教菩薩而即報身感者根品不同應現故通報化王城鷲嶺劫盡火燒鷲子聞經即化佛也我土安隱壽量長遠文殊在中即報身也應化非眞佛亦非說法者推功歸本即法身也所以稱讚大乘功德經住法界藏明法身說佛地經等住寶華王十八圓滿乃報身說此經王城跡即化佛說據理而言實通三佛應物現身非定一故楞伽經中說三佛身說法各別皆說法故由此勸師羅長者觀三尺以發心五百婆羅門見灰身而起信無邊身之菩薩窮上界而有餘住小聖之凡夫觀丈六而無盡今顯主尊教隨定勝初標教主令生喜心

(15) [5] Skt. 1.5; Tib. 1.4; Chin. 1c19.

(16) 665a8-666a14: 【4】經住王舍城耆闍崛山中(1c19)贊曰第四所化處也遊化居止目之爲住住者居止遊化安處之義居止在山遊化在城中佛依此中遊化安處古人因此解聖天梵佛等住住名雖同義意全別語遠義幽之處曾不屬心名同理別之文虛張援據此爲未可也梵云矩奢揭羅補羅城唐言上茅城摩揭陀國之正中古先君王所都之處多出勝上吉祥茅草因以爲名崇山四周以爲外郭西通狹徑北關山門東西長南北狹周一百五十餘里內宮子城周四十里羯尼迦樹遍諸道路華含殊馥色爛黃金暮春之月林皆金色宮城北門外有窰堵波是提婆達多與未生怨王共爲親友放護財醉象欲害如來如來指端出五師子醉象馴伏之處此東北有窰堵波是舍利子逢馬勝比丘得初果處此正北不遠有大深坑是室利毬多此云勝密火坑毒飯欲害佛處宮城東北行十四五里至婁栗陀羅矩吒山唐言鷲峯亦謂鷲臺接北山之陽孤標特起既栖棲鷲鳥又類高臺空翠相映濃淡分色佛成道後向五十年多居此山廣說妙法舊云耆闍崛山乃云靈鷲山鷲鳥於此食人屍名靈鷲山訛而略也頻婆娑羅王爲聞法故興發人徒

自山麓至峯峯跨谷陵巖編石爲階廣十餘步長五六里路有二窰堵波一謂下乘即王至此徒行以進二謂退凡即簡凡人不可同往其山頂東西長南北狹臨崖西垂有甍精舍高廣奇製東闢其戶如來在世多居說法今作說法之像量等如來之身精舍東有長石佛經行所履也傍有大石高丈四五周三十餘步是天授遙擲擊佛傷足出血者也其南岸下有窰堵波佛說法華經處山城北門行一里餘至迦蘭陀竹園園東有窰堵波未生怨王分得舍利建之供養竹林園西南行五六里南山之陰大竹林中有大石室是大迦葉波結集法藏之處竹林園北二百餘步至迦蘭陀池池西北二三里餘至曷羅闍結利咽城唐言王舍外郭已壞無復遺堵內城雖毀基趾猶存周二十餘里面有一門初頻婆娑羅王都在上茅宮城編戶之家頻遭火害一家縱逸四隣罹災不安其居衆庶嗟怨王曰我以不德人庶遭患修何德業可以攘之群臣白言大王德化衆庶不謹請制嚴科以懲後犯若更有犯遷之寒林寒林者棄尸之所俗謂不祥之地人絕遊往便同棄尸彼既恥居當自攝謹王遂其言以施嚴令乃先宮內自失火害王曰我其遷矣乃命太子監攝留事自遷寒林吠舍釐王聞住於野集軍來伐邊候奏聞王遂建城而居以王先舍於此故稱王舍城焉有云至未生怨嗣位已後方築此城乃更爲高厚非新築也至無憂王遷都波吒釐以王舍城施婆羅門故今城中無復凡庶唯婆羅門咸千家矣古人有說山城爲王舍城有九億家或云置千王於此皆謬也王都既在王舍佛住鷲峯城山兩處雙彰自他二化俱說利縑素故論云序分成就者此法門示現二種義成就一者一切法門中最勝故如王舍城勝餘一切城舍故城乃摩揭陀國之正中人人之所都處表一乘乃三乘之中道法王之所住境城既勝餘城故經勝餘經故也二者示現自在功德成就故如耆闍崛山勝餘諸山顯此法勝故俱蘇摩城既是山城近於王舍乃有多山此山獨勝高而顯故表法高顯出過二乘自在巍巍功德滿故或如城勝餘城無麗物而不出法勝餘法無嘉德而不具山勝餘山爲好鳥之所栖止法勝餘法爲上人之所止遊故復云妙喻通教理或教妙如城舍妙理故理高如山出二乘故所以此經在王城居鷲嶺有所表矣般若通貫五門舍衛豐其四德故多居彼不依餘處金生麗水東俗所傳提河有金西土咸悉生死如河流不竭故涅槃如金可寶重故既河中而有金表生死中有圓寂故於阿利羅拔提河邊說涅槃也各有所表由來遠矣古說此經合居四處初在靈山二塔涌空中三佛集淨土四囑累品中分身佛還後居穢土今解處三說唯在二處有三者無復還穢囑累居後分身佛還迄至經終皆唯淨土復還變穢說經便訖淨穢唯二一初在靈山穢土二分身佛將集佛便變淨并塔涌空處有三也說唯在二初在地上靈山創會爲二乘等宣暢一乘後塔涌空分身佛集釋迦與多寶同座勸信此經迄至經末佛令各還說經事訖佛方居地以後更不說法華故知說處但唯有二今標創會故說山城住標化處佛說化身欲令三乘欣樂同故顯佛悲深乘身俱妙能於穢處而施化故若標報佛及顯淨土恐二乘衆疑非已分不能修故由此但顯穢處化身

(17) [6] Skt. 1.6; Tib. 1.4; Chin. 1c20.

(18) 666a15-b12: 【5】經與大比丘衆萬二千人俱（1c20）贊曰七成就中自下第二衆成就也衆成就以五門解釋一顯來意二彰權實三定多小四明次第五依論解來意有五一爲證信標聽衆者助成慶喜聞法可信衆疑有三一疑慶喜自談二疑從他傳聞三疑餘人所說今顯同聞證經可信智度論云說時方人令生信故二爲顯德如天帝釋諸天圍繞大梵天王梵衆圍繞等今顯法王諸聖圍繞三爲啓請利物之方必應所欲次第宣唱先因後果身是果體行是因性乘爲所學方便品下鷲子三請爲乘權實故顯令捨權就實之境安樂行品文殊固請正明捨權就實之行壽量品中彌勒三請爲身權實故顯捨權就實之果因緣之經令除法慢若不因請企意難生故聲聞請境一乘正逗彼根悟菩薩請行及果讚證因亦利之四爲當機退菩提心者三根領悟三周說一乘菩薩領悟說壽量等隨類獲益聲聞凡夫遠

塵離垢發菩提心彼聖者類迴向大乘菩薩凡夫疑網皆遣證真達聖聖者菩薩得無生法忍等當得菩提故爲三機說
斯妙法五爲引攝當時衆集爲引當時餘生發心經具陳者爲引今時衆生發意若無勝侶淨信不生佛地論云列菩薩
者輔翼圓滿天龍等者眷屬圓滿淨土尚然何況穢利上來五義並爲來意

- (19) 666b12-20: 二者彰權實如佛地論一處化佛淨穢土中聲聞等實菩薩爲權報土之中菩薩爲實聲聞等權今此
化報俱有隨應兩實二權初列靈山化佛菩薩在中爲權衆生見於劫盡淨土常安壽量無邊報身報土聲聞等衆非實
況多寶分身悉爲化現准知報化權實理彰論中既說有化聲聞滿慈等是自餘化衆多寶分身等也
- (20) 666b20-c15: 三定多少者初有十五衆一高名大德衆二無名大德衆三尊重諸尼衆四內眷諸尼衆五聖德難
思衆六帝釋諸天衆七三光四王衆八自在衆九色界諸天衆十龍衆十一緊那羅衆十二乾闥婆王衆十三阿修羅
衆十四迦樓羅衆十五人王衆復有六衆一多寶二分三龍宮四涌出五妙音六普賢此衆二徒聞法證法行法持法
說法護法有差別故此中有六門異一三乘無獨覺獨覺多分出無佛世教雖彼彼時無果成故不在會仁王經中即具
有之下文亦陳有求彼者二三界無無色界光照有緣可來聞法彼界光所不及機亦不熟所以不來仁王亦有三五趣
無地獄光雖照彼無緣不來來有二義一光照二有緣地獄光臨無緣不至無色並闕所以不來一乘進習必假容豫之
身地獄苦逼無暇可習陀羅尼經本息衆苦威力所致地獄亦來此經進善彼無容暇故彼不來所以光照者令見生厭
故令彼見光發心苦息故四四衆無優婆塞優婆夷下威儀成就中具列初文略故五八部無夜叉及摩睺羅伽下亦具
有六二王無轉輪聖王唯有小王下亦具有此後三無下明所依威儀成就中一切具列
- (21) 666c15-667a2: 四明次第者初衆分四一聲聞衆二菩薩衆三八部衆四諸王衆或內護外護爲次內護中聲聞
菩薩爲次聲聞中僧尼爲次僧中有名無名爲次尼中尊重眷屬爲次外護中八部人王爲次八部中天非天爲次天中
地居空居爲次地居中帝臣爲次空居中非禪主禪主爲次後衆次第者證法衆開塔衆經利廣大衆持法無邊衆他方
行法衆他方勸持衆初衆之中聲聞居先菩薩居後者佛地論雖釋今爲四解一形相不同聲聞出家形同諸佛菩薩不
爾二處有近遠聲聞近佛菩薩遠之三戒德有殊聲聞出家持出家戒菩薩不爾隨類化生故四欲令菩薩於聲聞所捨
憍慢故然華嚴經羅摩伽經炬燵王經和休經大五濁經先列菩薩後列聲聞以德大小明先後故
- (22) 前述の衆会の圓滿の五義のうち、最後の「注釈の意味を説いたもの（依論釈）」となる。
- (23) 667a3-b9: 五依論釋解衆成就中有四一數二行三攝功德四威儀如法住數成就者謂大衆無數故總談無數
論各別標謂萬二千人等行成就中有四一諸聲聞修小乘行依乞食等自活以比丘等爲名二菩薩修大乘行求覺利
有情以菩提薩埵爲目三菩薩以神通力隨時示現能修行大乘如跋陀婆羅等十六人具足菩薩不可思議事由不定
故而能示現優婆塞等四衆之形說爲菩薩四出家人威儀一定不同菩薩由此定故說爲比丘攝功德成就者十六句
歎聲聞德十三句歎菩薩德等是然本論中不別標牒文義顯故威儀如法住成就者爾時世尊四衆圍繞等是明其四
衆繞佛威儀恭敬聽法而住相故雖各禮佛亦是威儀非聽法相故此不説十五衆中合爲三類菩薩聲聞具四成就其
有學無學及比丘尼具三成就歎德故餘天等具二無行無德論說衆成中合有四成就不言一一皆具四種然經明
衆成中有二段初別明十五衆後明威儀初中復二初別列衆後明禮佛各各退坐十五衆中分二初明內護衆後明外
護衆內護衆有二初明聲聞後明菩薩聲聞有二初明比丘後明尼衆比丘中有二初有名高德後無名大德初中有三
一標類舉數二歎德三列名此初也有二成就一數二行與者兼并共及之義龍樹釋言一處一時一心一戒一見一道
同一解脫道是名爲共

667b3-16: 大比丘智度論云三義解大諸衆中最大大障礙斷大人恭敬眞諦三釋一勝大學無學人中勝二體大功德智慧極高廣三數大萬二千人今合爲六一數大二離大大障礙斷三位大大阿羅漢故四德大如經所說故五名大名稱遠聞故六識大大人大衆所知識故梵云苾芻訛云比丘由具五義所以不翻一日怖魔初出家時魔宮動故二言乞土既出家已乞食日活故三名淨持戒漸入僧數應持戒故四云淨命既受得戒所起三業以無貪發不依於貪邪活命故五曰破惡漸依聖道滅煩惱故衆者僧也理事二和得衆名也三人已上得僧名故

(24) [7] Skt. 1.6-9; Tib. 1.4-8; Chin. 1c20-22.

(25) 『法華論』(大正, No. 1519, Vol. 26, p. 1b27-28) に説かれる「上上起門」「総別相門」「攝取事門」のことである。

(26) テキストには「愛 (sred pa)」とあるが、漢文に従い「有 (srid pa)」と読む。

(27) 667b17-669a1: 【6】經皆是阿羅漢至心得自在 (1c20-22) 贊曰此歎德也經有六句新翻及舊論中有十六句云皆是阿羅漢諸漏已盡無復煩惱得眞自在論云心得自在心善解脫慧善解脫論云善得心慧解脫如調慧馬論云心善調伏亦如大龍已作所作已辦所辦棄諸重擔逮得已利盡諸有結正知解脫論云善得正智心解脫至心自在第一究竟論有三釋一上上起門二總別相門三攝取事門上上起門者由上句故下句得起或由下句上句方起起非唯一故名上上起論以第二句釋初句云諸漏已盡故名阿羅漢即是論言應已永害煩惱賊故名阿羅漢漏以五門分別一釋總名諸漏皆云煩惱現行令心連注流散不絕名之爲漏如漏器漏舍深可厭惡損汚處廣毀責過失立以漏名此唯現行無復煩惱是種子故據實通種二列名漏有三種一欲漏二有漏三無明漏三出體欲界見道四十煩惱四諦一一皆具十故并修道六謂貪瞋慢無明身見邊見此中除五無明餘四十一根本煩惱并忿恨等二十隨惑並名欲漏色無色界以無瞋故各四十一於中各除五癡合七十二根本煩惱并色界諂誑及二界橋合此四小隨惑十六大隨煩惱説名有漏三界合有十五無明名無明漏四離合癡立欲唯散地唯有漏地通五趣地具四生地不善有覆無記二性感地所以獨立爲一欲漏上界俱定通無漏地一趣一生一性煩惱由此合立爲一有漏無明力增通相應不共爲前二所依以具十一殊勝事故離諸惑立五得名所從雖知三界一切煩惱應皆名有漏漏於三有有之漏故下界煩惱多緣欲起從勝爲名説爲欲漏上界諸惑更無別勝得其本名名爲有漏無明不以餘法爲名彰自行相名無明漏此漏非一故名爲諸然依瑜伽更有別釋繁故且止以第四句釋第二句云得眞自在故名諸漏已盡由證眞無爲漏盡自在故名諸漏盡以第二第三句釋第四句云以盡無煩惱故名得眞自在盡者諸漏已盡無煩惱者無復煩惱由現種惑無故得眞自在亦有本言以無煩惱故名得眞自在而無盡字唯第三句釋第四句又以第五第六句釋第四句云以善得心解脫善得慧解脫故名得眞自在以離定障名心解脫離性障故名慧解脫又離無明貪愛等體名慧解脫彼相應心得離縛故名心解脫由離此二證獲無爲得眞自在以第二句釋第三句云以遠離能見所見故名無復煩惱煩惱體唯取種子遠能見者離相應縛離所見者離所緣縛以離現行諸漏二縛故名無復煩惱或復單釋能見者執我心所見者所執我由無能執我見心故所執我相當情不現名離二見前諸漏盡是總無煩惱此無煩惱是別無我見我見爲本諸漏生事故不相違以第五第六句釋第七句云以善得心慧解脫故名心善調伏故如良馬其性調順以第九第十兩句釋第八句云亦如大龍者行諸惡道如平坦路無所拘礙應行者已行應到處已到故新經云已作所作已辦所辦故如大龍由已作道諦已辦滅諦所以如龍如龍威德雖行生死險阻之處如平坦路無所拘礙不爲生死而所留難生死因果皆已盡故滅道滿故論單釋第九句云應作者作人中龍已對治降伏煩惱怨敵道諦滿故能降集諦煩惱怨敵論單

釋第十句云所作已辦者更不復生如相應事已成辦故苦諦已盡滅諦滿故以第九第十句釋第十一句云離諸重擔者已作所作已辦所辦後生重擔已捨離故由滅道圓便捨後身生死諸法名棄重擔以第十一句釋第十二句云逮得已利者棄捨重擔證涅槃故即以涅槃爲已利故第十句釋第十三句云盡諸有結者已逮得已利斷諸煩惱因故煩惱爲生死因名爲有結三有之結也已逮得涅槃已利故所以能盡三有之結生死之因能和合苦能結故名結此有九種謂愛結結慢結無明結疑結見結取結嫉結慳結由此九種數數現起損惱自他招當苦增偏立爲結以第二句釋第十四句云正智解脫者諸漏已盡故以諸漏盡正智能證無爲解脫名智解脫單釋第十五句云至心自在者善過見道修道智故住見修道心未自在尚有惑故由成上諸句至無學道一切惑盡心自在位以第十四句釋第十六句云第一究竟者善得正智心解脫故善得神通無諍三昧等諸功德故成到彼岸之聲聞也准上論文唯有三句以下釋上名上起謂以第二句釋初句以第四句釋第二句以第九第十句釋第八句此以所起名起上即起名上起若能起名起上之起名上起此類非一名上上起准論唯有七句以上釋下名上起謂以第二句釋第三句以第五第六句釋第七句以第九第十句釋第十一句以第十一句釋第十二句以第十二句釋第十三句以第三句釋第十四句以第十四句釋第十六句此以能起名起上即是起名上起若以所起名起起之上名上起此類非一名上上起准論唯有三句單釋謂第九第十第十五句或第三句亦是單釋有二句不釋謂第五第六句有一句以上釋下亦以下釋上謂第四句總說頌曰下釋上有三上釋下有七三單二不釋一通於上下或上釋下有六四單二不釋今依此經文十六句中唯總有六句以下釋上有一句謂以諸漏已盡釋初皆是阿羅漢故以上釋下有二句謂以諸漏已盡釋無復煩惱又以逮得已利釋盡諸有結自餘闕故當句自釋漏如前釋唯取現行一切煩惱此諸漏已盡名阿羅漢者即是應已永害煩惱賊義解阿羅漢故入十地得阿羅漢名無復煩惱者論云遠離能見所見故名無復煩惱煩惱種子得煩惱名此可由彼雙離所緣相應現行二縛諸漏皆盡復更有煩惱種子能重斷故名爲遠離能見所見或總漏盡別執亦亡故遠二見名無復煩惱復者重也種子斷故無復重生由斷生死流轉法故名棄重擔故能逮證涅槃已利違音徒載反如音訓釋至也及也即由逮得之餘依涅槃已利故能永盡三有之因九結煩惱由上漏盡以下四句彼阿羅漢善過見道修道智故得心自在離性事障八解脫滿亦得名爲心得自在文既闕小不可次第依論解釋但可總取論之大義以釋經文諸有智者當自詳矣

- (28) 669a1-b3: 第二總別相門者謂皆是阿羅漢者是總相門餘十五句是別相門阿羅漢者總名應義應有十五義諸漏已盡下是一應受飲食等供養恭敬等者即諸漏已盡堪爲福田二應將大衆教化一切無復煩惱離名利等故三應入聚落城邑等故得真自在非爲欲境所牽惑故四應降伏外道等心善解脫具智辨故五應以智慧速觀察法慧善解脫了諸法故六應不遲速說法如法相應不生疲倦如調慧馬善稱心故七應靜坐空閑處飲食衣服等一切資生不積不聚小欲知足猶如大龍離閭闔故八應一向行善行不著諸禪已作所作常進修故九應行空聖行已辦所辦我我所非有故十應行無相聖行棄諸重擔觀滅理故十一應行無願聖行逮得已利不願生死故十二應降伏世間禪定淨心不生味著二有界定盡諸有結乃至於二界禪不生愛味故十三應起諸通殊勝功德正智解脫解脫謂神通故十四應到第一義功德至心自在證無爲故十五應如實知同生衆得諸功德爲利益一切衆生第一究竟故波羅蜜多聲聞廣度衆生令同已利得功德故第八修行不息十二於禪不著是二別意恐厭文繁略相配囑其間義意隨解可知應說頌曰受將入降以中靜行善行空無相無願伏起到實知經中六句唯有十五句中第一應受妙供第二應將大衆教化第十一應行無願聖行第十二應降伏世間禪淨心第十四應到第一義次第配下五句初阿羅漢是總句故

(29) 669b3-c25: 第三攝取事門者以十五句攝取十種功德事爲示現可說果不可說果故此中意說十五句中攝十種功德事爲顯阿羅漢所得有爲可說果無爲不可說果有相無相無細異故下隨應配一攝取得功德有二句謂諸漏已盡無復煩惱纏及隨眠二惑若在不能攝取功德由二惑亡故能攝取功德二攝取諸功德有三句謂得真自在心善解脫慧善解脫此三句中得真自在一句降伏世間功德世間之心不得自在種種惑纏由得真自在故永離惑纏心善解脫慧善解脫二句降伏出世間學人功德學人未得離二縛故三攝取不違功德有一句謂心善調伏隨順如來教行故猶如良馬善隨人心四攝取勝功德有一句亦如大龍有大威靈神力圓滿故如龍也五攝取所應作勝功德有一句謂應作所作所應作者依法供養恭敬尊重如來故非財供養名所應作正行法供養者是所應作彼已皆作此道諦法行供養佛故六攝取滿足功德有一句謂已辦所辦滿足學地故所學之地皆滿足故得滅諦滿七攝取過功德有三句謂棄諸重擔逮得已利盡諸有結初句過愛故生死重擔莫過貪愛今已過故次句過求命供養恭敬等故諸求供養恭敬皆爲資命今得已利已證涅槃過於邪命求利養等後句過上下界已過學地故有結者謂九結今已過有學之地過上下界故盡諸有結八攝取上上功德有一句謂正智解脫解脫者無爲果諸德之中最上上故九攝取應作利益衆生功德有一句謂至心自在由得神通得心自在及自內心離繫縛故攝取利益之行十攝取上首功德有一句謂第一究竟謂波羅蜜多聲聞堪到彼岸勝餘鈍類故應說頌曰初二名攝取次三攝諸德 順勝作滿足如次配四句三句名攝過過愛命二界上上利上首各一名攝德此經六句攝取十德中唯攝三德一攝取功德有二句謂諸漏已盡無復煩惱二攝取過功德有二句謂逮得已利盡諸有結過求邪命及過邪二界三攝取應作利益衆生功德有一句謂至心自在阿羅漢是總所以不取唯下十五句攝功德故成唯識中阿羅漢有三應已永害煩惱賊故應受世間妙供養故應不復受分段生故上上起門攝應永害賊無分段生總別相門攝應受妙供養攝取事門非彼三攝彼三但約決定義說一切阿羅漢不過三種故攝取事門唯俱解脫到彼岸者之所成故又上上起門永害煩惱總別相門堪受妙供攝取事門無分段生死宗義配之非理定爾新翻經云除阿難陀獨居學地此中略文

(30) [8] Skt. 1.9-2.2; Tib. 1.8-2.2; Chin. 1c22-23.

(31) 669c26-670b11: 【7】經 其名曰至那提迦葉 (1c22-23) 贊曰此下第三列名有二初別列名後結名高此二十一一人中或有以出家前後爲次第報恩經說初度五人次度耶舍門徒五十次度優樓頻螺門徒五百次度伽耶門徒三百次度那提門人二百次度鷲子門徒一百次度目連門人一百合舉大數成一千二百五十人或有行德大小爲次第如迦葉在第二列鷲子在迦旃延上列等隨應不定無垢稱經弟子品以德辨爲次第以命問疾要假智辨方堪對揚故十二由經初成道二年度五比丘三年化迦葉兄弟三人五年度目連機宜不同諸部結集誦經異故無量壽經云了本際者即阿若憍陳如梵云阿若多憍陳那憍陳是婆羅門姓那是男聲阿若多是解義初悟解故因果經中具說度憍陳那優樓頻螺伽耶那提四人所以初太子踰城之後父王乃命內外親族合有五人營衛太子五人交諍修苦樂行以爲道真太子誠檢依諸外道修苦樂行以過彼行皆非正術捨食乳糜受吉祥草覺樹成道後趣鹿園度此五人初轉法輪佛問解未五人之中陳那先報我今已解淨居等天亦言已解因以爲名名之爲解憍陳之姓乃衆多以解標名那是男聲以男簡女故復云那大般若云解憍陳那梵云摩訶迦葉波摩訶大也迦葉波者姓也此云飲光婆羅門姓上古有仙身有光明飲蔽日月之光迦葉是彼之種迦葉身亦有光能飲日月以姓爲名故名飲光大富長者之子捨大財姓出家能爲大行少欲知足行杜多行大人所識故標大名簡餘迦葉如因果經第三卷并彌勒疏具陳上二姓之所因次三迦葉皆飲光種兄弟三人梵云鄔盧頻螺言優樓訛也此云木瓜當其胸前有一癭起猶如木瓜又池中龍亦名木瓜從

彼爲稱故以爲名伽耶山名即象頭山亦云城近此山故名伽耶城梵云捺地迦言那提訛也此是河名正法華云上時象江三迦葉也然因果經說此三人皆近河邊修道佛作神通化之入法以大者胸上有木瓜癭或從池龍第二從山第三從河以爲名也

(32) [9] Skt. 2.2-8; Tib. 2.2-7; Chin. 1c23-25.

漢文はこのセクションを4つに分けて(1c25, 25-26, 26-27, 27-28)注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も1つにまとめている([9] = 【8・9・10・11】)。

(33) 670b12-c11: 【8】經 舍利弗至劫賓那(1c23-25)贊曰梵云奢利弗~~𑖀~~羅言舍利弗者訛也舍利云鷲即百舌鳥亦曰春鸚鵡羅言子以母才辨喻如鷲鳥此是彼子以母顯之故云鷲子又云過去身爲瓦師值釋迦佛發願願作釋迦弟子不但今者亦符往願復名優波提舍以能論議故兼得彼名梵云摩訶沒特伽羅言大目乾連者訛也此云大採菽氏上古有仙居山寂處常採菽豆而食因以爲姓尊者之母是彼之族取母氏姓而爲其名得大神通簡餘此姓故云大採菽氏從父本名俱利迦亦云拘多先云俱律陀訛也大般若云舍利子大採菽氏此二因緣如彌勒疏梵云摩訶迦多衍那云迦施延亦訛也大般若云大迦多衍那此云大剪剃種男剪剃種者是婆羅門姓上古多仙山中靜處年歲既久鬚髮稍長無人爲剃婆羅門法汚剃髮故一仙有子兄弟二人俱來觀父小者乃爲諸仙剃之諸仙願護後成仙貴爾來此種皆稱剪剃尊者身是男子威德特尊簡餘姓故云大剪剃種男又西方亦有取母姓者今顯是父姓故置男名古云繩扇母戀此子不肯改嫁如繩繫扇故名繩扇眞諦云思勝皆非也梵云阿泥律陀此云無滅佛之黨弟云阿樓駄訛也應作字不知字所出劫賓那者此云房宿佛與同房宿化作老比丘爲之說法因而得道故云房宿或云房星房星現時生故云房星

670c12-671a6: 【9】經 憍梵波提至摩訶俱絺羅(1c25-26)贊曰梵云笈房鉢底此云牛相憍梵波提訛也過去因摘一莖禾數顆墮地五百生中作牛償他今雖人身尚作牛蹄牛齒之相因號爲牛相比丘梵云頽麗伐多此云室星北方星也祀之得子因以爲名離波多訛也有云假和合即智度論說二鬼食人事也梵云畢蘭陀筏踰此云餘習言畢陵伽婆蹉訛也五百生中爲婆羅門惡性僞言今雖得果餘習尚在如罵恒河神故名餘習梵云薄矩羅此云善容言薄俱羅訛也毘婆尸佛入涅槃後有一比丘甚患頭痛善容時作貧人持一呵梨勒施病比丘比丘服訛病即除愈由施藥故九十一劫天上人中受福快樂今生婆羅門家其母早亡遂遇後母方便殺之經五不死後求出家得阿羅漢出家八十曾不患頭痛目不視女人面亦不入尼寺不爲女人說一句法後無憂王巡塔布施知其少欲但施一錢塔踣置地猶尚不受方知少欲如付法藏傳說此因緣梵云摩訶俱瑟恥羅此云大膝膝蓋故俱絺羅訛也此舍利弗舅氏因共佛論悟解得果如律中說

671a7-27: 【10】經 難陀至羅睺羅(1c26-27)贊曰梵云難陀此翻爲喜根本乃是牧牛之人因問佛牧牛十一事知佛具一切智獲阿羅漢甚極聰明音聲絕妙梵云孫達羅難陀此云艷喜孫陀羅訛也艷是妻號色美端嚴無比名艷喜是自名簡前牧牛難陀故言艷喜艷之喜故是佛親弟身長一丈五尺二寸佛到本城二日度之大勝生主之所生也梵云補剌拏梅呾利曳尼弗咀羅此云滿慈子云富樓那彌多羅尼子訛也滿是其名慈是母姓母性其慈今取母姓此滿尊者是慈女之子或滿及慈俱是母號名滿慈子梵云蘇補底此云善現舊云須菩提翻爲善吉非也梵云阿難陀此云慶喜但言阿難翻爲歡喜亦訛也世尊成道內外咸慶當喜時生故名慶喜梵云羅怛羅此云執日舊言羅睺羅翻爲障蔽非也 此中九人摩訶迦葉舍利弗大目乾連摩訶迦施延阿樓駄富樓那彌多羅尼子須菩提阿難羅睺羅如說

無垢稱經聲聞品疏第三四卷廣説所由恐繁不述

671a28-b7: 【11】經 如是至大阿羅漢等（1c28）贊曰結名高也論云諸王王子大臣人民帝釋梵天王等皆識知故又復聲聞菩薩佛等是勝智者皆善知故名衆所知識初解貴賤大衆所知後解大小聖衆所知無垢稱云皆爲一切衆望所識含此兩義舉二十一例取餘人故名爲等皆名大者論自解云心得自在到彼岸故所言等者以阿羅漢等非阿羅漢由阿難陀是初果故

(34) 【10】 Skt. 2.8-10; Tib. 2.7-8; Chin. 1c28-29.

漢文はこのセクションを3つに分けて（1c28-29, 29-2a1, 1-2）注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も1つにまとめている（【10】 = 【12・13・14】）。

(35) 671b8-11: 【12】經 復有學無學二千人（1c28-29）贊曰二無名大德衆也戒定慧三正爲學體進趣修習名爲有學進趣圓滿止息修習名爲無學唯無漏法爲體

671b12-21: 【13】經 摩訶波闍波提至六千人俱（1c29-2a1）贊曰三尊重諸尼衆也梵云摩訶鉢剌闍伏底此云大勝生主佛母有三此爲小母大術生佛七日命終此尼養佛大術姊妹之類故號爲姨母大勝生主本梵王名一切衆生皆彼子故從彼乞得因以爲名又一切佛弟子名爲大生三乘聖衆名爲勝生由養佛故爲大勝生大勝生之主名大勝生主雖從彼乞得亦以義爲名舊云波闍波提名大愛道皆訛略也度此因緣如律中説

671b22-c6: 【14】經 羅睺羅母至亦與眷屬俱（2a1-2）贊曰四內眷諸尼衆也梵云耶戍達羅此云持譽耶輸陀羅訛也形容美麗近遠聞知生育羅睺羅人讚詠故名持譽譽美稱也相傳釋云是乾闥婆女彼生兒爲樂神生女爲玉女也若稱玉女何得有子又佛出家後持譽父母欲得將還明非玉女未曾有經須達拏經瑞應經皆云羅睺羅是瞿姨之子佛有三夫人一瞿姨二耶輸三鹿野各有二萬姝女瞿姨無子是玉女彼從長母爲名亦無過失又經云佛有三子一善星二優婆摩耶三羅睺故涅槃云善星比丘菩薩在家之子上二尼衆各得出家道行久成希聞妙法有緣皆至眷屬俱來

(36) 【11】 Skt. 2.10-11; Tib. 2.9; Chin. 2a2.

(37) 671c20-672a8: 【15】經 菩薩摩訶薩八萬人（2a2）贊曰第五聖德難思衆文有三一標類舉數二歎德三列名此初也梵云菩提薩埵摩訶薩埵略云菩薩摩訶薩菩薩修行略有二門一自利大智爲首二利他大悲爲先菩提覺義智所求果薩埵有情義悲所度生依弘誓語故名菩薩以二爲境名爲菩薩有財釋也又覺是所求果有情是自身求三菩提之有情者故名菩薩或菩提是所求果薩埵者勇猛義不憚處時求大菩提有志有能故名菩薩二皆依主又菩提即般若薩埵謂方便如是二法能利能樂一切有情故名菩薩亦菩提亦薩埵或及初解皆持業釋摩訶大也薩埵如前今此菩薩位居八地已上爲簡前小及二乘位故言摩訶薩無著般若論云諸菩薩有七種大故此大衆生名摩訶薩埵如菩薩地説下大乘章中別當具列

(38) 【12】 Skt. 2.11; Tib. 2.9; Chin. 2a2-3.

(39) 672a9-b19: 【16】經 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉（2a2-3）贊曰自下第二歎德有十三句論以二門釋一上支下支門二攝取事門支者分義上支分謂總相下支分謂別相故論云應知阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是總相餘是別相此總相也無上正覺體即佛果所有五法謂淨法界及四智心品無著金剛般若論説阿耨多羅三藐三菩提顯示菩提及菩提道阿耨多羅此顯菩提自相解脫相故三藐三菩提顯示菩提者人平等相以菩提法故得知是

佛大智度論說智及智處俱說名般若菩薩地說菩提菩提斷皆名菩提故阿云無耨多羅云上三云正藐云等又三云正菩提云覺即是無上正等正覺此有四覺一無上覺是總也即顯菩提清淨法界二正覺簡外道邪覺故三等覺簡二乘但了生空偏覺故四又正覺簡菩薩菩薩因覺未滿果位非正覺故此顯菩提道即四智下一覺字貫通上四由具下三一切莫過超遍等喻真理所覺名無上覺然諸經論多說真理名無上菩提體以根本故今此雙取佛果理智俱名無上菩提於此二果俱不退轉云何不退轉由具下十因不退轉故於佛果能不退轉決定當證念念進修名不退轉退者失也轉者動也八地以上任運進修於大菩提修習不退無煩惱故亦復不爲一切有相功用所動名不退轉由此八地名不動地相用煩惱不能動故不退有四一信不退十信第六名不退心自後不退生邪見故二位不退十住第七名不退位自後不退入二乘故三證不退初地以上即名不退所證得法不退失故四行不退八地已上名不退地爲無爲法皆能修故今此菩薩皆八地已上故言於無上正等覺不退轉定當證故不退者非即不轉又不退有二一已得不退初地即得二未得不退八地方得無上正覺是未得法故八地以上能不退轉情祈正覺心進不動法駛流中任運轉故名不退轉此不退者即是不轉

(40) [13] Skt. 2.11-12; Tib. 2.9-10; Chin. 2a3-4.

(41) 672b20-673a18: [17] 經 皆得陀羅尼至轉不退轉法輪 (2a3-4) 贊曰下別支分有十二句以十種示現分二初九自利後一利他初九又二初八有爲德後一無爲德初中又二初五福慧後三悲智初五又二初三內行後二善緣初中有三初一熏修自利次一利他後一利法善緣二初中一遇緣修行後一讚美除疑三悲智中初一慈悲後二智慧此中有三一住聞法不退轉謂皆得陀羅尼陀羅尼者此云總持總持有二一攝二散攝者持也此即聞持聞於文義任持不忘即所聞之能持名之爲攝聞即總持總念慧也十地經云八地以上菩薩於一切法能堪能忍能持彼論解云堪謂聞慧思謂思慧持謂修慧於一修慧分三用故散者施也此有四種一法二義三能得菩薩忍四明呪施與衆生故此中二種初是能持即聞持是後是所持餘四種是復分爲二一自利聞持等也二他利法義等四因果別故二樂說不退轉謂樂說辨才辨才即是四辨七辨而樂說故四辨者即四無礙解一法無礙解二義無礙解此二如次即是解教理無滯智三詞無礙解即解諸方言音無滯智四辨說無礙解即說法等七辨無滯智七辨者一捷辨須言即言無奢吃故二迅辨懸河三冷不遲訥故三應辨應時應機不增減故四無疎謬辨凡說契經不邪錯故五無斷盡辨相續連環終無竭故六凡所演說豐義味辨一一句言多事理故七一切世間最上妙辨具甚深如雷清徹遠聞等五種聲故四無礙解至方便品釋多以後得智及正體智爲體外緣起故三說不退轉謂轉不退轉法輪法輪是所說常說此不退轉法輪故謂轉如前四位二種不退轉法名轉不退轉法輪又彌勒所問經云說自分功德名轉不退法輪說外分功德名轉不退法輪又說智名不退說福名不轉又說般若名不退說方便名不轉又說有爲事名不退說無爲理名不轉此法如輪故名法輪輪有三義一圓滿義八正道等轂輻輳等皆圓滿故二不定義佛從見道轉生修道從修道後生無學道自得此已復爲他說安置聖道於他身中如是展轉他得聖已復爲他說喻輪不定故名爲輪三摧壞義蟻蟻拒轍輪能摧之聖道在心能摧煩惱能摧未伏能鎮已伏如王輪寶故喻如法輪輪有五輪自性擇法覺支正見等是二法輪因能生聖道教聞思等三輪眷屬聖道助伴五蘊諸法四法輪境聖道所緣四諦等理五法輪果因道所證菩提涅槃轉者說也法既名輪說亦稱轉今隨所應說八地後行不退位此五法輪故名爲轉又此五體即是四法教理行果皆名法輪轉者動也顯也運也起也動宣言教顯揚妙理運聖道於聲前起真智於言後圓摧障惱名轉法輪下方便品當具顯示

(42) [14] Skt. 2.12-3.1; Tib. 2.10-3.1; Chin. 2a4-6.

(43) 673a19-b29: 【18】 經 供養無量至之所稱歎 (2a4-6) 贊曰此有三句初二句合爲第四依止善知識不退轉供養無量日千諸佛於諸佛所殖衆德本論名殖衆善根以己身心業依色身攝取故菩薩修行莫過身心今舉殊勝色身之業供養諸佛深植德本攝取己之身心一切所有善業供養有十菩薩地說一現前供養於對現前佛設利羅及制多等一切三寶親面供養二不現前供養於餘佛制多等作佛等想修不現前供養三現前不現前供養現對前時復作是念一佛制多等法性即三世十方諸佛制多等法性故我今者現前供養一佛制多等即是供養三世十方佛制多等修現前不現前供養四於如是所唯自供養五若起悲心以隨力物施貧苦等願彼安樂令他供養六俱供養自既作時復勸教他作此供養七財敬供養以華香等敬問禮拜乃至以珍寶等修財敬供養八廣大供養即以財敬長時多妙乃至淨念迴向菩提自力集財從他求得發願想化爲百千身恭敬禮拜一一化身出百千手持散華香出百千聲歌讚功德復出百千妙莊嚴具而爲供養於瞻部洲乃至十方所有供養普生隨喜雖少用功而興無邊廣大供養九無染供養不以輕慢矯詐放逸不淨等物修無染供養十正行供養若有須與修四無量乃至少時信忍離言眞如法性起無分別住無相心即爲守護菩薩淨戒乃至修行四攝事等修正行供養應念此爲最上最妙過前供養百千萬倍不可比喻修供養時應念如來是大福田具大恩德有情中尊難遇獨出衆義依止如佛既爾於法僧亦然如幽贊上卷說殖種也積也立也衆通平去二音五斷一切疑不退轉常爲諸佛之所稱歎爲者使也被也由諸菩薩八地已上位至斷於理事疑盡煩惱所知二疑俱盡故第八地名決定地乃被諸佛常所稱歎或由佛歎能斷衆疑衆疑菩薩住於何位及所得證今顯上位及所得證故除衆疑

(44) [15] Skt. 3.1-2; Tib. 3.1-3; Chin. 2a6-7.

(45) テキストには「滅する ('jig pa)」とあるが、漢文の「与」から「入れる ('jug pa)」と読む。

(46) 673c1-13: 【19】 經 以慈修身至到於彼岸 (2a6-7) 贊曰此中四句六爲何等事說彼彼法入彼彼事不退轉謂以慈修身論云以大慈悲而修身心此釋所由諸菩薩爲何等事外爲他說法內入證諸法以大慈悲熏修身心拔苦與樂故顯行二利但爲慈悲不由餘事慈悲各有三如下當說七入一切智如實境界不退轉謂善入佛慧此言顛倒應云入如實境界之一切智不退轉即入觀照智與下第九別若依論文便無異也八依我空法空不退轉通達大智達二我無智也九入如實境界不退轉到於彼岸窮實性故

(47) [16] Skt. 3.2-3; Tib. 3.3-4; Chin. 2a7-8.

(48) 673c14-674c14: 【20】 經 名稱普聞至百千衆生 (2a7-8) 贊曰此有二句合爲一句十應作所作住持不退轉名稱普聞無量世界故能住持佛法法令不滅衆生聞名信向修學能度無數百千衆生故名應作所作菩薩所應作謂利衆生故上來上支下支門下明攝取事門論有二釋論攝取事門者攝取諸功德事初番釋云示現諸菩薩住何等清淨地中因何等方便何等境界中所應作故此爲總標論下牒釋十三句中應分爲三於無上正等正覺不退轉一句是住何等清淨地中次有十句是因何等方便後之二句是何等境界中所應作故論牒釋中唯解初二句標不釋第三句何等境界中所應作地清淨者八地以上三地無相行寂靜清淨故此中以無相名無上正等正覺故後三地皆於無相行任運寂靜離障清淨名不退轉非諸垢染有相等之所退轉故第二句因何等方便者有四種一攝取妙法方便任持妙法以樂說力爲人說故此攝三句任持妙法者皆得陀羅尼由得聞持任持妙法令不捨離住在自心持之不忘故名任持以樂說力者樂說辨了故爲人說者轉不退轉法輪爲人說此不退輪故二攝取善知識方便以依善知識作所應作故此攝三句以依善知識者供養無量百千諸佛作所應作者於諸佛所植衆德本德本即善根是所應作

故由此常爲諸佛之所稱歎三攝取衆生方便以不捨衆生故此攝一句以慈修身由以大慈悲熏習身心故能不捨一切衆生常能救度四攝取智方便以教化衆生令入彼智故此攝三句善入佛慧通達大智到於彼岸由自有三智能令衆生攝取三智故自成三智者是諸衆生攝取三智之因初智知如實智自利智也次智是知事智利他智也後智是眞理智智實性也論中唯解此初標二句不釋何等境界中作所應作此攝二句名稱普聞無量世界是何等境界能度無數百千衆生是所應作由菩薩具三智等故名聞遠振十方世界能於此無量世界境界中度百千衆生作所應作度衆生者是諸菩薩之所應作故此初番訖第二復次云復有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘功德故此二句爲總標下自別釋二句者一示現諸地二攝取勝功德不同二乘功德故十三句中初四句是示現諸地後九句是攝取勝功德初四句示現諸地者皆於無上菩提不退轉一句是第八地故次二句是第九地次一句是第十地故論下釋示現諸地云八地無功用智不同下上故不同下者下功用行不能動故不同上者上無相行不能動故自然而行故上者勝行無相行也下者劣行功用行也唯識釋不動地云相用煩惱不能動故此論解不退轉謂功用不動無相行不動任運進修空有雙證不爲二動名不退轉於九地中得勝進陀羅尼門具足四無礙解自在故九地得聞持等滿名爲勝進具足七辨等爲他說法前第三地雖得聞持猶未圓滿今說滿位於第十地轉不退轉法輪得受佛位如轉輪王子以八九十地同示現諸地故論自結云下之九句名攝取功德上之三地皆同得之釋第二攝取勝功德者示現依何處依何心依何智依何等境界行依何等能辦故此有五句論爲初標下自別釋依何處攝三句供養無量百千諸佛於諸佛所植衆德本常爲諸佛之所稱歎論云依善知識處所故依何心者攝一句以慈修身論云我依度衆生心教化畢竟利益一切衆生故諸菩薩所作皆云我以度衆生爲心故言我依衆生心由畢竟能利益一切諸衆生故依何智者攝三句善入佛慧通達大智到於彼岸論云依三種智一授記密智爲衆生說深密義智記者記別解釋之義即佛慧也二諸通智以大神通利益衆生智即通達大智三眞實智證眞如智即到於彼岸彼岸即眞理故能到者智證之義依何等境界行者名稱普聞無量世界一句也諸世界有二一器二有情皆是菩薩修行所行之境界依何等能辦者能度無數百千衆生菩薩以三智於彼界中能辦何等事謂能度衆生隨合別配後之二句論乃解云依何等境界行依何等能辦者即三種智攝應知者文意謂以三智於世界境中能辦利益衆生事用故言三種智攝此翻意略不能具顯其意必爾

(49) [17] Skt. 3.3-4; Tib. 3.4-6; Chin. 2a8-9.

(50) 674c15-28: [21] 經 其名曰至得大勢菩薩 (2a8-9) 贊曰下列名爲二初列後結合有十八菩薩皆以願行爲名分爲七對此中初三拔苦與樂對曼殊室利云妙吉祥與衆生樂是北方常喜世界歡喜藏摩尼寶積佛聞名能滅四重等罪又云過去爲龍種上智尊王佛當來亦言成佛華嚴經說在此清涼五臺山與一萬菩薩俱阿耨盧枳帝濕伐邏耶云觀自在觀三業歸依而拔衆生苦略云觀音觀音授記經云阿彌陀佛滅度後次當作佛名普光功德山王佛此佛滅已大勢至菩薩次當作佛名善住功德寶王佛得大勢者所至之處世界振動有大威勢衆生遇者自然苦息獲大勝樂有前二能

(51) [18] Skt. 3.4-4.2; Tib. 3.6-4.2; Chin. 2a9.

漢文はこのセクションを7つに分けて (2a9, 10, 10-11, 11-12, 12, 13, 13-14) 注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も1つにまとめている ([18] = [22・23・24・25・26・27・28])。

(52) 674c29-675a1: [22] 經 常精進至菩薩 (2a9) 贊曰此二自利他對自行常動他利不倦

(53) 675a2-5: [23] 經 寶掌至菩薩 (2a10) 贊曰此三濟貧救對寶掌濟貧苦衆生手中出寶 藥王爲大藥樹救治

王諸疾 勇施一人通能二事勇出財藥財藥俱攝

- (54) 675a6-8: 【24】 經 寶月至菩薩 (2a10-11) 贊曰此三導明破闇對寶月能導智明如月可重月光破諸癡暗猶如月光滿月能爲二事
- (55) 675a9-12: 【25】 經 大力至菩薩 (2a11-12) 贊曰此二神通小大對由作神通警策有緣皆令發意能動百千世界名大力 能動無數世界名無量力
- (56) 675a13-15: 【26】 經 越三界至菩薩 (2a12) 贊曰此二離染進善對越三三界離染也越者離度義毘陀婆羅云賢護護守善法令不失故
- (57) 675a16-20: 【27】 經 彌勒至菩薩 (2a13) 贊曰此三世間出世間對彌勒姓慈拔離生死世間寶積導師引至彼岸出世寶積引至菩提善提法寶積而與之導師爲大導師引至涅槃圓寂故此三別合成七對
- (58) 675a21-24: 【28】 經 如是等至八萬人俱 (2a13-14) 贊曰此結也肇公云此皆菩薩無生身無生身者無處不生故言無生無生故塞三界門無處不生故垂形六道
- (59) [19] Skt. 4.2-3; Tib. 4.2-3; Chin. 2a15.
- (60) 675a25-b13: 【29】 經 爾時釋提桓因至二萬天子俱 (2a15) 贊曰上明內護五衆下明外護十衆於中人非人爲二非人中天非天爲二天中欲色界爲二欲界有三一帝釋二四王三自在初也或地居空居爲二地居中帝釋四王爲二此初也梵云釋迦提婆因達羅釋迦姓也此翻爲能提婆天也因達羅帝也正云能天帝釋提桓因云天帝釋俱訛倒也此在妙高山頂而住三十三天之帝主過去字憍尸迦此云繭兒名阿摩揭陀此云無毒害即摩揭陀國過去帝釋修因之處用爲國名彼國古名致甘露處即劫初帝釋與阿修羅戰以山爲乳海得甘露致於此地因以爲名焉帝釋往昔有三十二人以爲同伴有善法夫人圓生夫人歡喜夫人設支夫人同修勝業故生天中有善法堂圓生樹歡喜園阿修羅女設支夫人此等因緣如宗輪疏
- (61) 原文は“zla ba lha'i sras po”であるが、『法華經』のチベット訳は、“lha'i bu zla ba”とある。
- (62) [20] Skt. 4.3-5; Tib. 4.3-4; Chin. 2a15-17.
- (63) 675b14-25: 【30】 經 復有名月天子至萬天子俱 (2a15-17) 贊曰此四王衆三光乃是四王天攝更無別天有經觀音名寶意作日天子即此寶光大勢至名寶吉祥作月天子即此名月虛空藏名寶光作星天子此名普香日宮火精作經五十一踰繕那月宮水精作經五十踰繕那星亦水精作極大者十八乃至小者四俱盧舍一俱盧舍三里餘此並空中旋繞四洲四大天王東方持國南方增長西方醜目北方多聞居妙高之半腹第四層級亦住七金山之頂三光四天高下去地四萬踰繕那壽量形相如餘處說
- (64) [21] Skt. 4.5-8; Tib. 4.4-7; Chin. 2a17-18.
- (65) 675b26-c5: 【31】 經 自在天子至三萬天子俱 (2a17-18) 贊曰下空居天夜摩天觀史多天名自在天子得異熟果隨意所念勝下二天下二天果依樹而得今隨欲得名爲自在樂變化天他化自在天名天自在天子不樂異熟果樂自樂他變爲樂具而受用之名大自在又解他化天主名自在天第四禪主名大自在天又自在天是帝釋臣大自在天是帝釋之師若後二解無四空居欲界天也
- (66) [22] Skt. 4.8-10; Tib. 4.7-9; Chin. 2a18-20.
- (67) 675c6-21: 【32】 經 娑婆世界主至二萬天子俱 (2a18-20) 贊曰此色界天梵云索訶此云堪忍諸菩薩等行

利樂時多諸怨嫉衆苦逼惱堪耐勞倦而忍受故因以爲名娑婆者訛也初禪大小等於欲界一四天下千初禪始等二禪二禪爲火災頂一千二禪始等三禪三禪爲水災頂一千三禪始等四禪四禪爲風災頂乃是三千大千世界號爲娑婆世界也故娑婆界主大梵王即第四禪主梵摩云寂靜清淨淨潔皆得亦云梵潔也今唯言梵但略云爾尸棄者火災頂即初禪主火災尖頂故光明者二禪主小光無量光極光淨天主故等表三禪主也然大般若五百七十云堪忍界主持髻梵王故尸棄者頂髻也即持髻梵王是堪忍界主梵王之別名光明是餘禪主

(68) [23] Skt. 4.10-13; Tib. 4.9-11; Chin. 2a20-24.

(69) 675c22-676a9: [33] 經 有八龍王至眷屬俱 (2a20-24) 贊曰下明非天衆有五初龍衆也第一名喜次名賢喜此二兄弟善應人心風不鳴條雨不破塊初能令人喜後性賢令喜故以爲名娑伽羅者即鹹海之龍和修吉者此云九頭繞妙高食細龍之類也德叉迦者此云多舌舌有多故或由嗜語故名多舌阿那婆達多者此云無熱惱無熱惱池之龍離三熱惱故一非火沙所爍二無風吹衣露形三無妙翅鳥所食無此三種所生火惱名無熱惱華嚴經云大地菩薩爲此池龍興大悲雲蔭覆一切衆生離苦法門而得自在於鱗甲中流出諸水日夜無竭濟瞻部洲諸有情類 摩那斯者此云慈心華嚴經云將降雨時先雲七日待衆事了然後始雨故名慈心優鉢羅者此云紅蓮華居池爲名

(70) [24] Skt. 4.13-15; Tib. 4.11-13; Chin. 2a24-26.

(71) 676a10-16: [34] 經 有四緊那羅至眷屬俱 (2a24-26) 贊曰梵云緊捺洛此云歌神緊那羅訛也初歌四諦次歌緣起次歌六度後歌一乘或初三種歌三乘之教行後一歌一乘之理果故名持法或歌一乘教理行果如次配之隨佛所說一會之法所宜歌故如世樂音歌君德故

(72) [25] Skt. 4.15-5.2; Tib. 4.13-5.2; Chin. 2a26-28.

(73) 676a17-26: [35] 經 有四乾闥婆王至眷屬俱 (2a26-28) 贊曰樂音五孝反梵云末奴是若颯縛羅此云可意音亦名如意音樂者令人愛樂也正法華云一名柔軟天子二名和音天子也梵云健闥縛此云尋香行即作樂神乾闥婆訛也西域由此呼散樂爲健闥縛尋香氣作樂乞求故樂中有二類一非絲竹也鼓磬之類二是絲竹簫箏之輩非絲竹之下者名樂上者名樂音絲竹之下者名美上者名美音或此同前歌神音曲如次同彼

(74) [26] Skt. 5.2-3; Tib. 5.2-4; Chin. 2a28-b2.

(75) 676a27-b26: [36] 經 有四阿修羅王至眷屬俱 (2a28-b2) 贊曰梵云阿素洛此云非天素洛者天之異名阿之言非以多諂詐無天行故名曰非天如人不仁亦名非人瑜伽佛地論說爲天趣攝雜心名鬼趣正法念經是鬼畜趣伽陀經說鬼畜天三有云羅睺阿修羅是師子兒畜生所攝今依大乘瑜伽爲正此有五類一極弱者在人間山地中住即今西方山中有大深窟多是非天之宮以下四類十地經說二妙高山北大海之下二萬一千由旬有羅睺宮三次下二萬一千由旬有勇健宮四次下二萬一千由旬有華鬘宮五次下二萬一千由旬有毘摩質多羅宮准此已下八萬四千深於須彌矣與起世經相違彼說須彌東西去山一千由旬外有毘摩質多宮縱廣八萬由旬七重城等是別聚落亦復無失羅睺此云執日非天與天鬪時將四天王天先與其戰日月天子放盛光明射非天之眼此爲非天箭鋒以手執日障蔽其光故云執日今爲第四應知初列婆稚者舊云被縛非天前軍爲天所縛正云跋稚迦此云團圓正法華中最勝是即當勇健次執日後與天鬪時有勇健力跋陀縛義此非被縛依羅騫駝者依騫皆去聲駝平聲呼古云廣肩膊形貌更大次勇健後當華鬘是梵云吠摩質咄利此云綺畫明文其身或云寶錦用冠其服云毘摩質多羅訛也此爲最大天帝釋之婦公舍支之父說此因緣如宗輪疏

(76) [27] Skt. 5.4-5; Tib. 5.4-6; Chin. 2b2-5.

(77) 676b27-c16: 【37】經 有四迦樓羅王至眷屬俱 (2b2-5) 贊曰梵云揭路荼此云妙翅鳥羽色妙不唯全金故舊云迦樓羅翻爲金翅鳥皆訛謬也增一阿含說佛告諸比丘有四生妙翅鳥謂卵胎濕化有四生龍亦卵胎濕化比丘當知若卵生鳥欲食龍時上鐵叉樹自投於海是時此鳥以翅關水令兩向分而取卵生龍出而食之設欲取胎生龍等鳥即喪亡如是胎生鳥唯食胎卵二生龍濕生鳥食前三生龍於化生龍設欲食者鳥即喪亡化生鳥能食四生龍設使龍身而事佛者是妙翅鳥不能食噉所以者何如來恒行慈悲喜捨四等之心是四等心有大筋力有大勇猛不可阻壞故妙翅鳥不能食之故諸比丘當行四等之心今此次第即四生鳥亦云大威德者諸龍怖故威德廣大身兩翅相去三百三十六萬里大滿腹恒食飽如意額下有珠

(78) [28] Skt. 5.5-6; Tib. 5.6; Chin. 2b5-6.

漢文はこのセクションを2つに分けて(2b5-6, 6)注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も1つにまとめ、結びの文に対する注釈の翻訳を欠いている([28] = 【38・39】)。

(79) 676c17-677a1: 【38】經 韋提希子至眷屬俱 (2b5-6) 贊曰此人王衆佛以住此王城說法故獨舉之梵云吠題咽弗咄多古云思惟子今云吠是勝義題咽云身即東毘提訶之名彼毘提訶男聲中呼此吠題咽女聲中呼此是山名亦是彼山中神名從彼乞得因以爲名韋提希訛也梵云阿社多設咄路此云未生怨阿闍世訛也未生以前已結怨故亦名折指由造逆業聞小乘經懺悔已後猶墮拍毬地獄後得獨覺果涅槃經云闍王不遇者婆來月七日當墮地獄聞大乘經懺悔已後不墮地獄又有經云懺悔已後得柔順忍以母標名故言韋提希子阿闍世王加涅槃經等具陳其事

677a2: 【39】經 各禮佛足退坐一面 (2b6) 贊曰列衆中第二明其儀軌尊敬情深各禮佛足方受正法退坐一面

(本研究は日本学術振興会科学研究費基盤研究 (C) no.16K02161の助成を受けた研究成果の一部である)

〈付録〉「漢文テキスト「序品」の科文(1)」

支賛(T34)	経	妙法華(T9)	科文	名目(品数、偈頌数)	経論章疏(妙法華は除く)等の引用・言及
651b1	[1]	1c19	0	六門料簡	
661a26				妙法蓮華經支賛卷第一(末)	
661a28			6	第六經本文	
661a28			6-A	[洪]遵法師(1, 27)	(乃為指南)
661b2			6-B	吉藏師(1, 15. 5, 11[. 5])	法華義疏
661b8			6-C	[慧]淨法師(1, 19, 8)	妙法蓮華經疏述
661b10			6-D	今為二解	
661b10			6-D-1	序分(1), 正宗(8), 流通(9)	信解品, 提婆達多品, 普賢品, 法師品, 持品
661b27			6-D-2	序分(1), 一乘境(2), 一乘行(2), 一乘果(5), 流通(6)	方便品, 持品, 安樂行品, 從地涌出品, 如來壽量品, 常不輕品, 神力品
661c9			6-E	論說序品有七種成就	法華論, 序品
661c11		[1c19]	6-E-1	一序分成就(山・城)	法華論
661c13		1c20-	6-E-2	二衆成就	法華論
			6-E-2-1	一數	法華論
			6-E-2-2	二行	法華論
			6-E-2-3	三攝功德	法華論
			6-E-2-4	四威儀如法住	法華論
661c15		2b7-	6-E-3	三如來欲說法時至成就(十七名)	法華論, 無量義經
661c17		2b9-	6-E-4	四所依說法隨順威儀住成就(定・器・衆生世間)	法華論
661c19		2b16-	6-E-5	五依止說因成就	法華論
661c21		2b24-	6-E-6	六大眾生現前欲聞法成就	法華論
661c23		[3c11-]	6-E-7	七文殊師利答成就(十種事)	法華論
661c25			6-F	七中分二	
661c26			6-F-1	初二通序(6-E-1, 6-E-2), 通序有五	
661c26			6-F-2	後五別序(6-E-3-6-E-7)	
			[6-E-1]	「一序分成就」	
		1c19	6-F-1-1	一総頌已聞, 「如是我聞」	
			6-F-1-2	二說教時	
			6-F-1-3	三說教主	
			6-F-1-4	四所化處(序成但四)	
			[6-E-2]	「二衆成就」	
			6-F-1-5	五所被機(此入衆成)	
661c29			6-E-1-A	論本但說序二成就	法華論
			6-E-1-A-1	城	
			6-E-1-A-2	山	
662a4			6-F-1-1	「如是我聞」等三門分別	
662a5			6-F-1-1-1	一說之所由	大衛等經
662a15			6-F-1-1-2	二立之所以(十釈)	智度論, 仁王等經, 攝大乘, 諸論, [瑜伽師地]論, 毘婆沙, 顯揚論, 瑜伽論, 俱舍論, 智度論, 成唯識
662c7			6-F-1-1-3	三正釈其文	
662c7			6-F-1-1-3-1	「如是」(以上合有一十五釈)	仏地論(4), 真諦三藏(3), 注法華(1), 注無量義(1), 宝公(1), 真諦三藏の誤りか, 光宅[法華義記](1), 梁武帝(1), 長耳三藏(3)
663a22			6-F-1-1-3-2	「我聞」	
663a23			6-F-1-1-3-2-1	「我」(有三)	
663a27			6-F-1-1-3-2-1-1	問答1(四義)	
663b5			6-F-1-1-3-2-1-2	問答2(三義)	集法伝
663b18			6-F-1-1-3-2-2	「聞」	瑜伽
663b27			6-F-1-1-3-2-2-1	問答1(三義)	
663c6			6-F-1-1-3-2-2-2	問答2(二解)	
663c7			6-F-1-1-3-2-2-2-1	一者龍軍等言	龍軍等, 無性[摂大乘論釈], 彼論[同左], 論[同左], 經(楞伽經か)
663c20			6-F-1-1-3-2-2-2-2	二者親光等言	親光等, 世親[唯識二十論], 經[升摂波葉喻經]
664a9	[2]	1c19	6-F-1-2	二說教時[分], 「一時」, (二義)	
664a10			6-F-1-2-1	一法王啓化機器成集說聽事記	
664a11			6-F-1-2-2	二說者聽者共相會遇時分無別	
664a12			6-F-1-2-A	利耶相續無斷說聽究竟(二解)	
664a13			6-F-1-2-A-1	道理時	
664a20			6-F-1-2-A-2	唯識時	
664b1			6-F-1-2-A-2-1	不定約利耶	
664b3			6-F-1-2-A-2-2	不定約相續	
664b9			6-F-1-2-A-2-3	不定約四時六時八時十二時	
664b14			6-F-1-2-A-2-4	不定約成道已後年數時節	
664b17			6-F-1-2-A-2-A-1	然諸經中有說相續	序品
664b19			6-F-1-2-A-2-A-2	有說四時	涅槃經

664b20			6-F-1-2-A-2-A-3	有説六時八時十二時	涅槃經、金剛般若、上生經、遺教經〔仏垂般涅槃略説教誡經〕
664b24			6-F-1-2-A-2-A-4	有説成道已後年數時節	十地經、方便品、無量義〔經〕
664c2			6-F-1-2-A-2-A-5	問答1	
664c7	[3]	1c19	6-F-1-3	三説教主、「仏」	
664c8			6-F-1-3-1	覺有三義	
664c9			6-F-1-3-1-1	自覺勝凡夫	
664c9			6-F-1-3-1-2	覺他勝二乘	
664c10			6-F-1-3-1-3	覺行圓滿勝諸菩薩	
664c11			6-F-1-3-2	仏地論	仏地論
664c21			6-F-1-3-3	問答1	稱讃大乘功德經、仏地經等、楞伽經
665a8	[4]	1c19	6-F-1-4	四所化處、「住王舍城耆闍崛山中」	
665a9			6-F-1-4-1	住者居止遊化安處之義	
665a10			6-F-1-4-1-1	居止在山	
665a10			6-F-1-4-1-2	遊化在城中仏依此中遊化安處	
665a11			6-F-1-4-2	古人	
665a14			6-F-1-4-3	梵云鉅奢羯羅補羅城	〔大唐西域記〕
665c5			6-F-1-4-4	古人有説	
			6-E-1-B	序分成就者此法門示現二種義成就	法華論(T26, 1b6)
665c9			6-E-1-B-1	一切法門中最勝故	法華論
665c13			6-E-1-B-2	示現自在功德成就故	法華論
665c28			6-F-1-4-5	古説	
			6-F-1-4-5-1	初在靈山	序品
			6-F-1-4-5-2	二塔涌空中	見宝塔品
			6-F-1-4-5-3	三仏集淨土	見宝塔品
			6-F-1-4-5-4	四囑累品中分身仏還後居穢土	囑累品
			6-F-1-4-5-A	今解處三説唯在二	
666a1			6-F-1-4-5-A-1	處有二	囑累品
			6-F-1-4-5-A-1-1	一初在靈山穢土	
			6-F-1-4-5-A-1-2	二分身仏將集仏便變淨	
			6-F-1-4-5-A-1-3	并塔涌空	
666a2			6-F-1-4-5-A-2	説唯在二	
			6-F-1-4-5-A-2-1	初在地上靈山創會	
			6-F-1-4-5-A-2-2	後塔涌空分身仏集	
666a15	[5]	1c20[-2b7]	6-E-2-A	第二衆成就(五門)	法華論
			6-E-2-A-1	一顯來意	
			6-E-2-A-2	二彰權實	
			6-E-2-A-3	三定多小	
			6-E-2-A-4	四明次第	
			6-E-2-A-5	五依論解	
			6-E-2-A-1	來意有五	
666a18			6-E-2-A-1-1	一為證信(衆疑有三)	智度論
666a22			6-E-2-A-1-2	二為顯德	
666a23			6-E-2-A-1-3	三為啓請	方便品、安樂行品、壽量品
666b3			6-E-2-A-1-4	四為當機	
666b8			6-E-2-A-1-5	五為引攝	仏地論
666b12			6-E-2-A-2	二彰權實	仏地論、論(法華論か)
666b20			6-E-2-A-3	三定多小	
666b20			6-E-2-A-3-1	初有十五衆	
			6-E-2-A-3-1-1	一高名大德衆	
			6-E-2-A-3-1-2	二無名大德衆	
			6-E-2-A-3-1-3	三尊重諸尼衆	
			6-E-2-A-3-1-4	四內眷諸尼衆	
			6-E-2-A-3-1-5	五聖德難思衆	
			6-E-2-A-3-1-6	六帝釈諸天衆	
			6-E-2-A-3-1-7	七三光四王衆	
			6-E-2-A-3-1-8	八二自在衆	
			6-E-2-A-3-1-9	九色界諸天衆	
			6-E-2-A-3-1-10	十龍衆	
			6-E-2-A-3-1-11	十一緊那羅衆	
			6-E-2-A-3-1-12	十二乾闥婆王衆	
			6-E-2-A-3-1-13	十三阿修羅衆	
			6-E-2-A-3-1-14	十四迦樓羅衆	
			6-E-2-A-3-1-15	十五人王衆	
666b26			6-E-2-A-3-2	復有六衆	
			6-E-2-A-3-2-1	一多宝	
			6-E-2-A-3-2-2	二分身	
			6-E-2-A-3-2-3	三龍宮	
			6-E-2-A-3-2-4	四涌出	

		6-E-2-A-3-2-5	五妙音	
		6-E-2-A-3-2-6	六普賢	
666b28		6-E-2-A-3-3	有六門異	
666b29		6-E-2-A-3-3-1	一三乘無獨覺	仁王經
666c2		6-E-2-A-3-3-2	二三界無無色界	仁王[經]
666c4		6-E-2-A-3-3-3	三五趣無地獄(未有二義)	陀羅尼經
666c11		6-E-2-A-3-3-4	四四衆無優婆塞優婆夷	
666c12		6-E-2-A-3-3-5	五八部無夜叉及摩睺羅伽	
666c13		6-E-2-A-3-3-6	六二王無轉輪聖王	
666c15		6-E-2-A-4	四明次第	
666c16		6-E-2-A-4-1	初衆分四	
		6-E-2-A-4-1-1	一聲聞衆	
		6-E-2-A-4-1-2	二菩薩衆	
		6-E-2-A-4-1-3	三八部衆	
		6-E-2-A-4-1-4	四諸王衆	
666c17		6-E-2-A-4-A-1	內護	
		6-E-2-A-4-A-1-1	聲聞	
		6-E-2-A-4-A-1-1-1	僧	
		6-E-2-A-4-A-1-1-1-1	有名	
		6-E-2-A-4-A-1-1-1-2	無名	
		6-E-2-A-4-A-1-1-2	尼	
		6-E-2-A-4-A-1-1-2-1	尊重眷屬	
		6-E-2-A-4-A-1-1-2-2	眷屬	
		6-E-2-A-4-A-1-2	菩薩	
		6-E-2-A-4-A-2	外護	
		6-E-2-A-4-A-2-1	八部	
		6-E-2-A-4-A-2-1-1	天	
		6-E-2-A-4-A-2-1-1-1	地居	
		6-E-2-A-4-A-2-1-1-1-1	中帝	
		6-E-2-A-4-A-2-1-1-1-2	臣	
		6-E-2-A-4-A-2-1-1-2	空居	
		6-E-2-A-4-A-2-1-1-2-1	非禪主	
		6-E-2-A-4-A-2-1-1-2-2	禪主	
		6-E-2-A-4-A-2-1-2	非天	
		6-E-2-A-4-A-2-2	人王	
666c22		6-E-2-A-4-2	後衆次第	
		6-E-2-A-4-2-1	證法衆	
		6-E-2-A-4-2-2	開塔衆	
		6-E-2-A-4-2-3	經利広大衆	
		6-E-2-A-4-2-4	持法無迦衆	
		6-E-2-A-4-2-5	他方行法衆	
		6-E-2-A-4-2-6	他方勤持衆	
666c24		6-E-2-A-4-1-A	初衆之中声聞居先菩薩居後	仏地論
666c25		6-E-2-A-4-1-B	今為四解	
		6-E-2-A-4-1-B-1	一形相不同	
		6-E-2-A-4-1-B-2	二処有近遠	
		6-E-2-A-4-1-B-3	三戒德有殊	
		6-E-2-A-4-1-B-4	四欲令菩薩於声聞所捨憍慢故	
666c29		6-E-2-A-4-1-C	先列菩薩後列声聞	華嚴經, 羅摩伽經, 炬燵王經, 和休經, 大五濁經
667a3		6-E-2-A-5	五依論解	法華論
		6-E-2-A-5-1	一數	法華論
		6-E-2-A-5-2	二行	法華論
		6-E-2-A-5-3	三摂功德	法華論
		6-E-2-A-5-4	四威儀如法住	法華論
667a4		6-E-2-A-5-1	數成就	法華論
667a6		6-E-2-A-5-2	行成就中有四	法華論
667a6		6-E-2-A-5-2-1	一諸声聞修小乘行	法華論
667a7		6-E-2-A-5-2-2	二菩薩修大乘行	法華論
667a8		6-E-2-A-5-2-3	三菩薩以神通力隨時示現能修行大乘	法華論
667a12		6-E-2-A-5-2-4	四出家人威儀一定不同菩薩	法華論
667a13		6-E-2-A-5-3	摂功德成就	法華論
		6-E-2-A-5-3-1	十六句歡声聞德	法華論
		6-E-2-A-5-3-2	十三句歡菩薩德	法華論
667a15	2b7f	6-E-2-A-5-4	威儀如法住成就	法華論
667a18		6-E-2-A-5-A	十五衆中合為三類	
667a19		6-E-2-A-5-A-1	菩薩声聞具四成就	
667a19		6-E-2-A-5-A-2	其有學無學及比丘尼具三成就不歡德故	
667a20		6-E-2-A-5-A-3	余天等具二無行無德	

667a21			6-E-2-A-5-A-4	論説衆成中有四成就不言一普具四種	法華論
667a22			6-F-1-5	經明衆成中有二段	
			6-F-1-5-1	初別明十五衆	
			6-F-1-5-1-1	初別列衆	
			6-F-1-5-1-1-1	初明内護衆	
			6-F-1-5-1-1-1-1	初明声聞	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1	初明比丘	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-1	初有名高德	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-1-1	一標類學數	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-1-2	二歎德	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-1-3	三列名	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2	後無名大德	
			6-F-1-5-1-1-1-1-2	後明尼衆	
			6-F-1-5-1-1-1-2	後明菩薩	
			6-F-1-5-1-1-2	後明外護衆	
			6-F-1-5-1-2	後明礼仏各各退坐	
			6-F-1-5-2	後明威儀	
667a29			6-F-1-5-A	有二成就	
			6-F-1-5-A-1	一數	
			6-F-1-5-A-2	二行	
667a29		1c20	6-F-1-5-B	「与」	智度論
667b2		1c20	6-F-1-5-C	「大比丘」(今合爲六)	智度論, 真諦釈
			6-F-1-5-C-1	一數大	
			6-F-1-5-C-2	二難大	
			6-F-1-5-C-3	三位大	
			6-F-1-5-C-4	四德大	
			6-F-1-5-C-5	五名大	
			6-F-1-5-C-6	六識大	
667b9			6-F-1-5-C-A	梵云苾芻	
			6-F-1-5-C-A-1	一曰佈魔	
			6-F-1-5-C-A-2	二言乞士	
			6-F-1-5-C-A-3	三名淨持戒	
			6-F-1-5-C-A-4	四云淨命	
			6-F-1-5-C-A-5	五日破惡	
667b15		1c20	6-F-1-5-D	「衆」	
667b17	[6]	1c20-22	6-F-1-5-1-1-1-1-1-2	歎德	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-1	經有六句	妙法華(1c20-22): ①皆是阿羅漢, ②諸漏已尽, ③無復煩惱, ④達得已利, ⑤尽諸有結, ⑥心得自在 = 玄贊では⑤
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-2	新翻及旧論中有十六句	新翻(大般若經, T5, 1b9-13): ①皆阿羅漢, ②諸漏已尽, ③無復煩惱, ④得真自在, ⑤心善解脫, ⑥意善解脫, ⑦如調慧馬, ⑧亦如大龍, ⑨已作所作, ⑩已辦所辦, ⑪樂諸重擔, ⑫達得已利, ⑬尽諸有結, ⑭正知解脫, ⑮至心自在, ⑯第一究竟 旧論(法華論, 1a17-22): ①皆是阿羅漢, ②諸漏已尽, ③無復煩惱, ④心得自在, ⑤善得心解脫, ⑥善得意解脫, ⑦心善調伏, ⑧人中龍, ⑨已作所作, ⑩所作已辦, ⑪離諸重擔, ⑫達得已利, ⑬尽諸有結, ⑭善得正智心解脫, ⑮一切心得自在, ⑯到第一彼岸
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-2-1	[新翻]①皆是阿羅漢, ②諸漏已尽, ③無復煩惱	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-2-1	[新翻]①皆是阿羅漢, ②諸漏已尽, ③無復煩惱	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-2-2	[新翻]④得真自在, 論云④心得自在	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-2-3	[新翻]⑤心善解脫, ⑥慧善解脫, 論云⑤⑥善得心・慧解脫	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-2-4	[新翻]⑦如調慧馬, 論云⑦心善調伏	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-2-5	[新翻]⑧亦如大龍, ⑨已作所作, ⑩已辦所辦, ⑪樂諸重擔, ⑫達得已利, ⑬尽諸有結	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-2-6	[新翻]⑭正知解脫, 論云⑭善得正智心解脫	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-2-7	[新翻]⑮至心自在, ⑯第一究竟	
667b24			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3	論有三釈	法華論
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1	上上起門	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2	総別相門	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3	攝取事門	
667b26			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1	上上起門	法華論, [大般若經]
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-1	(1)以第二句釈初句	
667c1		1c20	6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-A-1	「漏」以五門分別	
667c1			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-A-1-1	一釈総名	諸論

667c5		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-A-1-2	二列名(漏有三種)	
667c6		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-A-1-3	三出体	
667c13		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-A-1-4	四離合廢立	
667c19		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-A-1-5	五得名所從	瑜伽
667c25		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-2	(2)以第四句釈第二句	
667c27		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-4	(4)以第五第六句釈第四句	
668a2		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-3	(3)以第二第三句釈第四句, 唯第三句釈第四句	法華論に第二はない, 有本
668a3		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-4	(4)以第五第六句釈第四句	
668a8		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-5	(5)以第二句釈第三句, 或復單釈	法華論に以第二句はない
668a16		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-6	(6)以第五第六句釈第七句	
668a18		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-7	(7)以第九第十句釈第八句	法華論に第九第十句はない, 新経(大般若經)
668a24		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-8	(8)單釈第九句	法華論は單釈ではない
668a27		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-9	(9)單釈第十句	
668a29		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-10	00以第九第十句釈第十一句	
668b3		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-11	01以第十一句釈第十二句	
668b5		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-12	02以第十二句釈第十三句	
668b12		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-13	03以第二句釈第十四句	
668b14		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-14	04單釈第十五句	
668b18		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-A-15	05以第十四句釈第十六句	
668b20		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-B-1	以下釈上名上起, 三句((1), (2), (7)), 所起	
668b24		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-B-2	以上釈下名上起, 七句((5), (6), 00, 01, 02, 03, 05), 能起	以第三句は以第二句の誤り
668c3		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-B-3	單釈, 三句(⑨=(8), ⑩=(9), ⑪=04, 或⑬=(3))	
668c5		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-B-4	不釈, 二句((5)=③, (6)=⑤, ⑥)	
668c5		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-B-5	以上釈下亦以下釈上, 一句((4)=⑤, ⑥)	
668c6		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-C	総説頌曰	
668c9		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-D	今依此経文	
668c10		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-D-1	以下釈上有一句, 以②釈①	
668c11		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-D-2	以上釈下有二句, 以②釈③, 以②釈⑬	
668c13		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-1-D-3	自余闕故当句自釈	
668c13		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-A-2	「漏」如前釈	
668c16		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-B	「無復煩惱」, 由上漏尽以下四句	法華論
669a1		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2	総別相門	法華論, [大般若經]
		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-1	総相門, 「皆是阿羅漢」	
		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2	別相門, 余十五句	
		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-1	阿羅漢, 総名「応」義	
		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A	「応」有十五義「諸漏已尽」下	
669a4		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-1	一応受飲食等供養恭敬敬等=②	
669a5		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-2	二応將大衆教化一切=③	
669a6		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-3	三応入聚落城邑等放=④	
669a7		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-4	四応降伏外道等=⑤	
669a8		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-5	五応以智慧達觀察法=⑥	
669a10		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-6	六応不遲速說法=⑦	
669a11		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-7	七応靜坐空閑處=⑧	
669a13		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-8	八応一向行善行不著諸禪=⑨	
669a14		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-9	九応行空聖行=⑩	
669a15		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-10	十応行無相聖行=⑪	
669a16		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-11	十一応行無願聖行=⑫	
669a17		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-12	十二応降伏世間禪定淨心=⑬	
669a19		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-13	十三応起諸通殊勝功德=⑭	
669a21		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-14	十四応到第一義功德=⑮	
669a22		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-A-15	十五応如實知同生衆得諸功德=⑯	
669a24		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-B	第八・十二, 別意	
669a26		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-C	応説頌曰	
669a28		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-2-2-D	經中六句=②③④⑤⑥⑦	
669b3		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3	撰取事門	法華論, [大般若經]
669b4		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-A	以十五句撰取十種功德事(下隨応配)	
669b8		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-A-1	一撰取得功德有二句=②③	
669b10		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-A-2	二撰取諸功德有三句=④⑤⑥	
669b16		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-A-3	三撰取不違功德有一句=⑦	
669b18		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-A-4	四撰取勝功德有一句=⑧	
669b19		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-A-5	五撰取所応作勝功德有一句=⑨	
669b23		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-A-6	六撰取滿足功德有一句=⑩	
669b25		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-A-7	七撰取遍功德有三句=⑪⑫⑬	
669c3		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-A-8	八撰取上上功德有一句=⑭	
669c5		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-A-9	九撰取応作利益衆生功德有一句=⑮	
669c7		6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-A-10	十撰取上首功德有一句=⑯	

669c9			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-B	応説頌曰	
669c12			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-C	此經六句(唯撰三德)	
669c13			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-C-1	一撰取功德有二句 = ②, ③	
669c14			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-C-2	二撰取功德有二句 = ⑫, ⑬	
669c16			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-C-3	三撰取應作利益衆生功德有一句 = ⑮	
669c17			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-C-4	阿羅漢是總 = ①	
669c18			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-D	阿羅漢有三	成唯識
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-D-1	已永害煩惱賊故(上上起門)	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-D-2	応受世間妙供養故(總別相門)	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-D-3	応不復受分段生故(上上起門)	
669c24			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-D-4	又上上起門永害煩惱	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-D-5	總別相門堪受妙供	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-3-3-D-6	撰取事門無分段生死	新翻經(大般若經)
669c26	[7]	1c22-23	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3	第三列名(二十一人)	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1	初別列名	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-2	後結名高	
669c28			6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-A	或有以出家前後為次第	報恩經
670a5			6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-B	或有行德大小為次第	
670a6			6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-C	以德辨為次第	無垢稱經弟子品
670a8			6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-D	機宜不同諸部結集諸經異故	十二由經
670a10		1c22	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-1	阿若憍陳如(梵云阿若多憍陳那)	無量壽經, 因果經, 大般若
670a23		1c22	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-2	梵云摩訶迦葉波	因果經第三卷, 弥勒疏
670b2		1c22-23	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-3	梵云鄒盧頻螺	
670b5		1c23	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-4	伽耶	
670b7		1c23	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-5	梵云捺地迦	正法華, 因果經
670b12	[8]	1c23-25, 1c23-24	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-6	梵云奢利弗咄囉	
670b18		1c24	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-7	梵云摩訶沒特伽羅	大般若, 弥勒疏
670b25		1c24	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-8	梵云摩訶迦多衍那	大般若, 真諦
670c7		1c24	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-9	梵云阿泥律陀	
670c9		1c24-25	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-10	劫賣那	
670c12	[9]	1c25-26, 1c25	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-11	梵云婆房鉢底	
670c16		1c25	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-12	梵云頡盧伐多	智度論
670c19		1c25	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-13	梵云畢闍陀筏蹉	
670c22		1c25-26	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-14	梵云薄鉢羅	付法藏伝
671a3		1c26	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-15	梵云摩訶俱瑟恥羅	律
671a7	[10]	1c26-27, 1c26	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-16	梵云難陀	
671a10		1c26	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-17	梵云孫達羅難陀	
671a14		1c26-27	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-18	梵云補刺摩咄利曳尼弗咄囉	
671a19		1c27	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-19	梵云蘇補底	
671a20		1c27	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-20	梵云阿難陀	
671a22		1c27	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-1-21	梵云羅怛羅	說無垢稱經疏声聞品第三・四卷
671a28	[11]	1c28	6-F-1-5-1-1-1-1-1-3-2	結名高	法華論, 無垢稱, 法華論
671b8	[12]	1c28-29	6-F-1-5-1-1-1-1-1-2	二無名大德衆	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-1	有字	
			6-F-1-5-1-1-1-1-1-2-2	無字	
671b12	[13]	1c29-2a1	6-F-1-5-1-1-1-1-2-1	三尊重諸尼衆	
			6-F-1-5-1-1-1-1-2-1-1	梵云摩訶鉢剌闍伏底	律
671b22	[14]	2a1-2	6-F-1-5-1-1-1-1-2-2	四內眷諸尼衆	
			6-F-1-5-1-1-1-1-2-2-1	梵云耶朶達羅	未曾有經, 須達拏經, 瑞應經, 涅槃
671c18				妙法蓮華經玄贊卷第二(本)	
671c20	[15]	2a2	6-F-1-5-1-1-1-2	第五聖德難思衆	
			6-F-1-5-1-1-1-2-1	一標類拳數	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2	二歎德	
			6-F-1-5-1-1-1-2-3	三列名	
671c22			6-F-1-5-1-1-1-2-1-1	梵云菩提薩埵摩訶薩埵	
			6-F-1-5-1-1-1-2-1-1-1	一自利	
			6-F-1-5-1-1-1-2-1-1-2	二利他	無著[金剛]般若論, 菩薩地[持經]
672a9	[16]	2a2-3	6-F-1-5-1-1-1-2-2	第二歎德有十三句	妙法華(2a2-8): ①皆於阿耨多羅三藐三菩提不退転, ②皆得陀羅尼, ③樂說辯才, ④転不退転法輪, ⑤供養無量百千諸仏, ⑥於諸仏所殖衆德本, ⑦常為諸仏之所稱歎, ⑧以慈修身, ⑨善入仏慧, ⑩通達大智, ⑪到於彼岸, ⑫名稱普聞無量世界・能度無數百千衆生(=二句)
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1	論以二門歎	法華論(1a22-28): ①皆於阿耨多羅三藐三菩提不退転, ②皆得陀羅尼, ③大辯才樂說, ④転不退転法輪, ⑤供養無量百千諸仏, ⑥於諸仏所殖諸善根, ⑦常為諸仏之所稱歎, ⑧以大慈悲而修身心, ⑨善入仏慧, ⑩通達大智, ⑪到於彼岸, ⑫名稱普聞無量世界・能度無數百千衆生(=二句)
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1	一上支下支門	

			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2	二撰取事門	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1	上支分調總相	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2	下支分調別相	法華論(2a28)
672a14			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-1	阿耨多羅三藐三菩提 = ①・無上正等正覺(四覺)	無著金剛般若論, 大智度論, 菩薩地持經]
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-1-1	一無上覺	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-1-2	二正覺	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-1-3	三等覺	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-1-4	四又正覺	
672a29			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-2	無上菩提・不退転(十因不退転)	諸經論
672b8			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-2-1	不退有四	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-2-1-1	一信不退	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-2-1-2	二位不退	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-2-1-3	三證不退	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-2-1-4	四行不退	
672b15			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-2-2	又不退有二	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-2-2-1	一已得不退	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-1-2-2-2	二未得不退	
672b20	[17]	2a3-4	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2	下別支分有十二句以十種示現	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1	初九自利 = ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1	初八有為德 = ①②③④⑤⑥⑦⑧	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-1	初五福慧 = ①②③④⑤	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-1-1	初三內行 = ①②③	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-1-1-1	初一熏修自利 = ①	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-1-1-2	次一利他 = ②	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-1-1-3	後一利法 = ③	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-1-1-2	後二善緣 = ④⑤	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-1-1-2-1	初一遇緣修行 = ①	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-1-1-2-2	後一讀免除疑 = ②	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-1-2	後三悲智 = ③④⑤	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-1-2-1	初一慈悲 = ⑥	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-1-2-2	後二智慧 = ⑦⑧	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-1-1-2	後一無為德 = ⑨	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-A-2	後一利他 = ⑩	
672b27		2a3-4	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1	此中有三 = ②③④	
672b27		2a3	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-1	一住聞法不退転 = ②	法華論(2b2-3)
672b28			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-1-1	陀羅尼, 總持有二	
672b29			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-1-1-1	一攝, 開持, 初是能持, 自利聞持等	十地經, 彼論(十地經論)
672c5			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-1-1-2	二教, 施(此有四種), 後是所持, 他利法義等四	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-1-1-2-1	一法	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-1-1-2-2	二義	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-1-1-2-3	三能得菩薩忍	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-1-1-2-1-2-4	四明呪	
672c9		2a3-4	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2	二樂說不退転 = ③	法華論(2b3-4)
672c11			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1	四辨, 四無礙解	方便品
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-1	一法無礙解	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-2	二義無礙解	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-3	三詞無礙	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-4	四辨說無礙解	
672c14			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-2	七辨	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-2-1	一捷辨	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-2-2	二迅辨	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-2-3	三応辨	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-2-4	四無疎謬辨	契經
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-2-5	五無斷尽辨	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-2-6	六凡所演說盡義味辨	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-2-7	七一切世間最上妙辨	
672c22		2a4	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-3	三說不退転 = ④	法華論(2b4-5), 弥勒所問經[論](cf. 法華義疏)
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-3-1	輪有三義	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-3-1-1	一圓滿義	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-3-1-2	二不定義	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-3-1-3	三摧壞義	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-3-2	法輪有五	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-3-2-1	一輪自性	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-3-2-2	二法輪因	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-3-2-3	三輪眷屬	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-2-1-3-2-4	四法輪境	

			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-1-3-2-5	五法輪果	方便品
673a19	[18]	2a4-6	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2	此有三句 = ⑤⑥⑦	
673a20		2a4-5	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1	第四依止善知識不退転 = ⑤⑥(初之二句合)	法華論(2b5-7)
673a25			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1-1	供養有十	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1-1-1	一現前供養	菩薩地[持經]
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1-1-2	二不現前供養	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1-1-3	三現前不現前供養	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1-1-4	四於如是所唯自供養	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1-1-5	五若起悲心以隨力物施貧苦等願彼安樂令他供養	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1-1-6	六俱供養	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1-1-7	七財敬供養	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1-1-8	八廣大供養	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1-1-9	九無染供養	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-1-1-10	十正行供養	[般若波羅蜜多心經] 幽贊上卷
673b23		2a5-6	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-2-2	五斷一切疑不退転 = ⑦	法華論(2b7-8)
673c1	[19]	2a6-7	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-3	此中四句 = ⑧⑨⑩⑪	
673c2		2a6	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-3-1	六為何等事說彼彼法入彼彼事不退転 = ⑧	法華論(2b8-10)
673c7		2a6	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-3-2	七入一切智如實境界不退転 = ⑨	法華論(2b10-11)
673c10		2a6	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-3-3	八依我空法空不退転 = ⑩	法華論(2b11-12)
673c12		2a6-7	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-3-4	九入如實境界不退転 = ⑪	法華論(2b12-13)
673c14	[20]	2a7-8	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-4	此有二句合為一句 = ⑫	
673c14		2a7-8	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-1-2-4-1	十應作所作住持不退転 = ⑫	法華論(2b13-15)
673c19			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2	撰取專門(論有二釈)	法華論
673c20			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1	初番(此為總標 = (1)(2)(3))	法華論(2b16-17) : (1)示現諸菩薩住何等清淨地中、(2)因何等方便、(3)何等境界中所作所應作故
673c23			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1	論下標釈十三句中應分為三	法華論
		2a2-3	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1-1	於無上正等正覺不退転一句(= ①)是住何等清淨地中(= (1))	法華論(2b16)
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1-2	次有十句(= ②…⑩)是因何等方便(= (2))	法華論(2b17)
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1-3	後之二句(= ⑫)是何等境界中所作所應作故(= (3))	法華論(2b17)
673c26			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1-A	論標釈中唯解初二句標(= (1)(2))不釈第三句(= (3))	法華論
673c27			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1-1	地清淨者…名無上正等正覺故(= (1)・①)後三地	法華論(2b18-19)
674a2			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1-2	第二句因何等方便者有四種(= (2))	法華論
674a3		2a3-4	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1-2-1	一撰取妙法方便(此撰三句 = ②③④)	法華論(2b19-20)
674a8		2a4-5	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1-2-2	二撰取善知識方便(此撰三句 = ⑤⑥⑦)	法華論(2b20-21)
674a13		2a6	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1-2-3	三撰取衆生方便(此撰一句 = ⑧)	法華論(2b21-22)
674a16		2a6-7	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1-2-4	四撰取智方便(此撰三句 = ⑨⑩⑪)	法華論(2b22-23)
674a21			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-1-1-3	論中唯解此初標二句…此撰二句(= ⑫)	法華論
674a28			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2	第二復次(此二句為總標 = (1)(2))	法華論(2b24-25) : (1)示現諸地、(2)撰取勝功德不同二乘功德故
674b1			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1	自別釈二句	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-1	一示現諸地(十三句中初四句)	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2	二撰取勝功德不同二乘功德故(後九句)	
674b4		2a2-4	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-1	初四句示現諸地	
		2a2-3	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-1-1	皆於無上菩提不退転一句(= ①)是第八地故	
		2a3-4	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-1-2	次二句(= ②③)是第九地	
		2a4	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-1-3	次一句(= ④)是第十地	
674b6			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-1-A	故論下釈示現諸地云	
674b6			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-1-A-1	[八地](八地無功用…名不退転)	法華論(2b25-28)、唯識
674b13			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-1-A-2	[九地](於九地中…為他說法)	法華論(2b28-29)
674b15			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-1-A-3	[十地](前第三地…示現諸地故)	法華論(2b29-c1)、前第三地は二地の誤りか
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-1-B	論自結云	法華論
674b18			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2	第二撰取勝功德、此有五句、論為初標	法華論(2c2-3)
674b22			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2-1	下自別釈	
674b22		2a4-6	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2-1-1	依何處撰三句 = ⑤⑥⑦	法華論(2c3-4)
674b25		2a6	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2-1-2	依何心者撰一句 = ⑧	法華論(2c4-5)
674b29		2a6-7	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2-1-3	依何智者撰三句 = ⑨⑩⑪、依三種智	法華論(2c5-7)
674c1		2a6	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2-1-3-1	授記密智 = ⑨	法華論(2c6-7)
674c3		2a6	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2-1-3-2	諸通智 = ⑩	法華論(2c6-7)
674c4		2a6-7	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2-1-3-3	真實智 = ⑪	法華論(2c6-7)
674c6		2a7	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2-1-4	依何等境界行者 = 名稱普聞無量世界、諸世界有二	法華論(2c7)

			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2-1-4-1	一器	
			6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2-1-4-2	二有情	
674c8		2a7-8	6-F-1-5-1-1-1-2-2-1-2-2-1-2-1-5	依何等能辨者 = 能度無數百千衆生, 後之二句	法華論(2c7-8)
674c15	[21]	2a8-9	6-F-1-5-1-1-1-2-3	列名為二	
			6-F-1-5-1-1-1-2-3-1	初列	
			6-F-1-5-1-1-1-2-3-2	後結	
674c16			6-F-1-5-1-1-1-2-3-1	含有十八菩薩, 分為七對	
674c17			6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-1	此中初三拔苦与樂對	
674c18		2a8	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-1-1	曼殊室利	華嚴經
674c22		2a8-9	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-1-2	阿縛盧枳帝濕伐邏耶	觀音授記經
674c26		2a9	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-1-3	得大勢	
674c29	[22]	2a9	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-2	此二自利他對	
		2a9	[6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-2-1]	[常精進菩薩]	
		2a9	[6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-2-2]	[不休息菩薩]	
675a2	[23]	2a10	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-3	此三濟貧救對	
675a2		2a10	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-3-1	宝掌	
675a3		2a10	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-3-2	棄王	
675a4		2a10	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-3-3	勇施	
675a6	[24]	2a10-11	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-4	此三導明破闇對	
675a6		2a10-11	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-4-1	宝月	
675a7		2a11	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-4-2	月光	
675a8		2a11	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-4-3	滿月	
675a9	[25]	2a11-12	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-5	此二神通小大對	
675a9		2a11	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-5-1	大力	
675a11		2a11-12	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-5-2	無量力	
675a13	[26]	2a12	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-6	此二離染進善對	
675a14		2a12	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-6-1	越三	
675a14		2a12	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-6-2	觀陀婆羅	
675a16	[27]	2a13	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-7	此三世間出世間對	
675a17		2a13	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-7-1	弥勒	
675a17		2a13	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-7-2	宝積	
675a18		2a13	6-F-1-5-1-1-1-2-3-1-7-3	導師	
675a21	[28]	2a13-14	6-F-1-5-1-1-1-2-3-2	結	[僧]肇公
675a25	[29]	2a15	6-F-1-5-1-1-2	上明内護五衆下明外護十衆	
			6-F-1-5-1-1-2-1	人	
			6-F-1-5-1-1-2-2	非人	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1	天	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1-1	欲	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-1	一帝釈	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-2	二四王	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-3	三自在	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-A	地居	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-A-1	帝釈	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-A-2	四王	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-B	空居	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1-2	色界	
			6-F-1-5-1-1-2-2-2	非天	
675b1		2a15	6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-A-1	[六帝釈諸天衆], 梵云觀迦提婆因達羅	宗輪疏
675b14	[30]	2a15-17	6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-A-2	[七三光四王衆], 四王衆	
675b15		2a16	6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-A-2-1	宝光	有經
675b16		2a16	6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-A-2-2	名月	
675b17		2a16	6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-A-2-3	普香	
675b22		2a16-17	6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-A-2-4	四大天王	
675b26	[31]	2a17-18	6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-B	[八二自在衆], 空居天	
675b26		2a17	6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-B-1	夜摩天・觀史多天名自在天子	
675b29		2a17-18	6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-B-2	樂變化天・他化自在天名自在天子	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-B-A-1	他化天主名自在天, 第四禪主名自在天	
			6-F-1-5-1-1-2-2-1-1-B-A-2	自在天是帝釈臣, 自在天是帝釈之師	
675c6	[32]	2a18-20	6-F-1-5-1-1-2-2-1-2	[九色界諸天衆], 色界天	
675c7		2a18	6-F-1-5-1-1-2-2-1-2-1	梵云素調	
675c14		2a19	6-F-1-5-1-1-2-2-1-2-2	梵摩	
675c16		2a19	6-F-1-5-1-1-2-2-1-2-3	尸棄	大般若五百七十
675c17		2a19	6-F-1-5-1-1-2-2-1-2-4	光明	
675c22	[33]	2a20-24	6-F-1-5-1-1-2-2-2	明非天衆有五	
			6-F-1-5-1-1-2-2-2-1	[十龍衆], 初龍衆	
675c23		2a20	6-F-1-5-1-1-2-2-2-1-1	第一名喜	
675c23		2a21	6-F-1-5-1-1-2-2-2-1-2	次名賢喜	

675c25		2a21	6-F-1-5-1-1-2-2-2-1-3	娑伽羅	
675c26		2a21	6-F-1-5-1-1-2-2-2-1-4	和修吉	
675c27		2a22	6-F-1-5-1-1-2-2-2-1-5	德叉迦	
675c28		2a22	6-F-1-5-1-1-2-2-2-1-6	阿那婆達多	華嚴經
676a6		2a22-23	6-F-1-5-1-1-2-2-2-1-7	摩那斯	華嚴經
676a8		2a23	6-F-1-5-1-1-2-2-2-1-8	優鉢羅	
676a10	[34]	2a24-26	6-F-1-5-1-1-2-2-2-2	[十一緊那羅衆], 梵云緊捺洛	
		2a24	6-F-1-5-1-1-2-2-2-2-1	初歌四諦(初三種歌三衆之教行), 歌一衆教	
		2a24-25	6-F-1-5-1-1-2-2-2-2-2	次歌緣起, 歌一衆理	
		2a25	6-F-1-5-1-1-2-2-2-2-3	次歌六度, 歌一衆行	
		2a25	6-F-1-5-1-1-2-2-2-2-4	後歌一衆(後一歌一衆之理果), 歌一衆果	
676a17	[35]	2a26-28	6-F-1-5-1-1-2-2-2-3	[十二乾闥婆王衆], 梵云健闥縛	
		2a26-27	6-F-1-5-1-1-2-2-2-3-1	衆	正法華
		2a27	6-F-1-5-1-1-2-2-2-3-2	衆音	
		2a27	6-F-1-5-1-1-2-2-2-3-3	美	
		2a27-28	6-F-1-5-1-1-2-2-2-3-4	美音	
676a27	[36]	2a28-b2	6-F-1-5-1-1-2-2-2-4	[十三阿修羅衆], 梵云阿素洛	瑜伽, 仏地論, 雜心, 正法念經, 伽陀經, 有云(慧遠か), 瑜伽, 十地經, 起世經
676b14		2b1	6-F-1-5-1-1-2-2-2-4-1	羅睺	
676b17		2a29	6-F-1-5-1-1-2-2-2-4-2	婆稚	正法華
676b21		2a29	6-F-1-5-1-1-2-2-2-4-3	佉羅耆歌	
676b23		2b1	6-F-1-5-1-1-2-2-2-4-4	梵云吠摩質咄利	宗輪疏
676b27	[37]	2b2-5	6-F-1-5-1-1-2-2-2-5	[十四迦樓羅衆], 梵云揭路荼	旧云(吉藏か), 増一阿含
676c14		2b2-3	6-F-1-5-1-1-2-2-2-5-1	大威德	
676c14-15		2b3	6-F-1-5-1-1-2-2-2-5-2	大身	
676c15		2b3-4	6-F-1-5-1-1-2-2-2-5-3	大滿	
676c15-16		2b4	6-F-1-5-1-1-2-2-2-5-4	如意	
676c17	[38]	2b5-6	6-F-1-5-1-1-2-1	[十五人王衆], 人王衆	
676c18		2b5	6-F-1-5-1-1-2-1-1	梵云吠摩質咄多	
676c23		2b5	6-F-1-5-1-1-2-1-2	梵云阿社多設咄路	涅槃經, 有經, 涅槃經
677a2	[39]	2b6	6-F-1-5-1-2	列衆中第二明其儀軌	

〈キーワード〉

『妙法蓮華經玄贊』、『法華經』、「序品」、基、慈恩大師